



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	満州事変をどう教えるか : 教育内容・教材構成と授業実践の分析
Author(s)	奥山, 友貴
Citation	教授学の探究, 26, 1-43
Issue Date	2009-02-16
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35598
Type	departmental bulletin paper
File Information	okuyama.pdf



満州事変をどう教えるか

—— 教育内容・教材構成と授業実践の分析 ——

奥 山 友 貴

(北海道大学大学院教育学研究科修士課程)

目 次

1. はじめに
 2. 分析の視点
 - 2-1 教育内容の設定
 - 2-2 先行研究の検討
 3. 教育内容構成および教材構成
 - 3-1 教育内容の論理構造と骨子
 - 3-1-1 二面的帝国主義と2つの対外方針
 - 3-1-2 陸軍の暴走を許した大日本帝国憲法下の政軍関係
 - 3-1-3 柳条湖事件の勃発と事変の拡大
 - 3-1-4 ジャーナリズムと国民の戦争支持
 - 3-2 授業プラン「満州事変 ～発生と拡大～」の教材構成
 4. 授業実践と評価
 - 4-1 授業記録と授業過程の分析
 - 4-2 授業全体の評価
 - 4-3 授業プランの改訂に向けて
 5. まとめと今後の課題
- 引用・参考文献
- 授業プラン

1. はじめに

歴史教育が社会科の一部であり、また教科（科目）の一部である以上、民主主義や平和を守る人間を育てることが、歴史教育にとって、他の教科と同様に目指されるべき到達点である。そのためには、遠山茂樹が定義した社会科の学力、すなわち「社会についての科学的認識のための基礎的な知識と基礎的な思考力」¹を子どもに習得させることが求められる。それが、加藤公明の述べる「どんなに些細な事と思われても、自分たちの社会の民主主義や平和にとってどのような意味をもっているかを的確に判断し、そこに独裁や専制、人権侵害や戦争への危険性を察知すれば、みんなで声をあげて反対できる能力と態度」²を養成する。日本の近代史に

1 遠山茂樹『歴史学から歴史教育へ』（1980 岩崎書店）p106

2 加藤公明『考える日本史授業3』（2007 地歴社）p4

おける戦争の歴史は、上記のような目標を達成する教育内容として大きな意味を持つものである。近代日本は、民主主義を粉碎し、平和とは対極の状態に自ら入り込んでいった。このような自国の歴史を教えることは、民主主義と平和を守る人間を養成するうえで大変重要な課題である。しかし戦後の歴史教育において、このような教育がしっかりと行われてきたとは必ずしも言えない。教科書検定訴訟や昨今の自由主義史観にみられるような歴史叙述に象徴されるように、戦争に対する反省の希薄化が社会全体に見受けられる。(神田 1991) また、様々な機関で行われている歴史認識に関する世論調査が示しているように、多くの日本人が曖昧な戦争認識を有している³。

これは、歴史教育が戦争史の科学的認識を形成するような授業を充分に行ってこなかったことが大きな要因であろう。感性的に「戦争はいやだ、してはいけない」という認識は形成されているものの、「あの戦争は何だったのか」という科学的認識が形成されていないために生じたと考えられる。

また、教科書記述も問題を有している。満州事変について、日本の歴史教育を神話的な国史教育から科学的な歴史教育に転換させた画期的な意義をもつとされている教科書『くにのあゆみ』では、「南満州鉄道が、ふいに、ばくはされました」と記述されている。戦争という人間の行う行為があたかも、天から降ったように偶然に始まったかのような記述であり、日本陸軍が謀略として爆破したことはもちろん、満州事変の原因が全くと言ってよいほど言及されていない。『くにのあゆみ』における歴史叙述の超客観主義がその後の歴史教育の叙述の原型となって今日まで影響を及ぼしており、歴史事象を因果的・構造的にとらえる視点も教科書から奪われてしまった。(藤岡 1991) 現行の日本史の教科書においても、史実が羅列的に記述され、背景や原因といったものが捨象されている。歴史(戦争史)の科学的認識にはほど遠い。

かつてコール西ドイツ首相が「過去は我々とともにあり、若い世代も責任を負っている。いかなるドイツ人もナチス犯罪の責任から逃れることはできない。…今世紀の歴史を知る者の目は、現代の危機と誘惑に対しても鋭くなる」と演説したように、過去の日本の歴史を科学的に認識しうる歴史教育こそが、「不確実な現在を未来に向けて方向づける」⁴ のであり、二度と戦争を起こさないためには何をすべきかということを思考できる人間を養成するのである。

以上より、本稿では戦争史の科学的認識の形成という目標のもと、これを実現するためにはいかなる授業プランが必要であるかということを、歴史学研究および戦争史教育に関する優れた先行事例に学びつつ考察していきたい。

3 以下は 2005～2006 年の大手新聞社による世論調査の結果の一部である。詳しくは吉田・森 (2007) を参照されたい。

①2005 年 8 月 毎日新聞社

「この戦争[アメリカや中国との戦争]が間違った戦争だったと思いますか。」

・間違った戦争だった…43% ・やむを得ない戦争だった…29% ・わからない…26%

②2006 年 4 月 朝日新聞社

「日本が行ったこの戦争は、(中略) 侵略戦争だったと思いますか。自衛戦争だったと思いますか？」

・侵略戦争だった…31% ・自衛戦争だった…7% ・両方の面がある…45% ・よく知らない、答えない…17%

4 井上寿一『日本外交史講義』(2006 岩波書店) p3

2. 分析の視点

2-1 教育内容の設定

加藤文三は、自身の実践の中で、戦争反対を主張していた生徒が、日露戦争の主戦論対非戦論についての討論の過程で、植民地にされるより戦争をやったほうが良いという意見に「転向」した例を挙げ、「体験・実感・感情といったものが、もし科学的な認識にうらづけられていないならば、きわめて弱いものであり、たやすく逆のものに転化する」⁵と述べる。戦争の悲惨さを学び、平和を愛する気持ちを持つことができて、それは戦争を二度と繰り返さないための学力を持った人間になれたと言えるのだろうか。感性に訴えるだけではなく、「二度と侵略戦争をおこさせないための力になるには、過去におこした侵略戦争の原因と阻止できなかった原因を知」⁶ることが必要であり、そのためには「事実の本質、事実と事実の関連をつかみ、子ども自身が諸事実を分析・総合という思考作業を通して」⁷理解することが重要である。「この戦争の知的認識こそ、子どもが社会に出た暁、平和を守る上での大切な武器となる」⁸のだ。戦争の悲惨さの理解と戦争の科学的認識が合わさって、はじめて戦争を学んだと言えるのだが、これまでの歴史教育では前者に重点が置かれ、それに比して後者の積み上げが少ないという傾向があるのではないだろうか。

筆者は、以上のような観点から、戦争の歴史を教えるための教育内容として満州事変を取り上げる。1930年代の日本外交は、満州事変から敗戦までの中国に対する連続した侵略のプロセス、すなわち「十五年戦争」⁹の脈絡の中で理解されてきた。戦争同時体験者にとって、満州事変、上海事変、日支事変、大東亜戦争（アジア太平洋戦争）というようにニュースがばらばらに伝わってきたが、満州事変と日中戦争とアジア太平洋戦争は、相互に内的に関連した一連の戦争であるという立場である。この見解は、多くの研究者たちに受け継がれた。満州事変の延長線上に華北分離を介した日中戦争があり、日中戦争の延長線上に第二次世界大戦と連動したアジア太平洋戦争が生じた¹⁰というのがこの見解の支柱である。

江口圭一は、近代日本の政治構造論を「二面的帝国主義論」によって説明し、満州事変を転換点とする「アジア・モンロー主義」路線の主流化＝対英米協調路線の後退という構図を示した。すなわち、近代日本の政治構造は軍事的に英米に対抗しながらも、経済的には英米に依存し、その経済依存によって軍事大国として自立を求める「二面的帝国主義」であった。この矛盾から、近代日本には対英米協調路線と「アジア・モンロー主義」という対立する二つの対外路線が形成されたというのが十五年戦争論の論理である。そして1920年代においては、ワシントン体制に順応する前者の路線が主流（＝政府方針）だったが、満州事変を契機として、対

5 加藤文三『歴史教育論の展開』（1973 新日本出版社）p181

6 小松豊『加害の面を中心にすえた十五年戦争の学習』『日本の歴史 十五年戦争Ⅰ』（1992 新興出版社）p166

7 小松豊『加害の面を中心にすえた十五年戦争の学習』『日本の歴史 十五年戦争Ⅰ』（1992 新興出版社）p166

8 遠山茂樹『歴史学から歴史教育へ』（1980 岩崎書店）p55

9 「十五年戦争」という呼称は、1956年に鶴見俊輔によって初めて用いられた

10 日米交渉の最大の争点の一つが満州国の解消であったこと、日本の中国に対する武力攻撃が15年間継続されたという連関性による。

英米協調を支持する国内諸政治勢力の反対を押し切って路線転換が強行され、「アジア・モンロー主義」が対外路線の基調となり、この路線の下で中国に対する武力侵攻が拡大した（井上1994）。以上のような系統的解釈は、まさしく侵略の実態と戦争責任の所在の解明を目的として、構造的要因を重視する包括的で完結した内容を持っている¹¹。

以上より、1945年に終わった一連の戦争の始まりは満州事変であったと言えよう。しかし、満州事変が起こった原因となる状況はなぜ作り出されたか、より具体的に言えば、なぜ協調外交が瓦解したかということが背景知識として重要である。戦争とは背反するはずの協調外交がなぜ戦争という事態に転換したのか。なぜ初期の段階で食いどめられなかったのか。このような内容こそ、満州事変を教える中で提示すべき重要な史実であると考ええる。

したがって、本研究では、満州事変を引き起こす直接のきっかけとなった「二面的帝国主義」の要因と、それに伴って発生した2つの対外方針を学び、戦争がなぜ発生・拡大したのかを当時の日本の国家システムに着目することによって理解することができる授業プランの作成を目的とする。また、世論がなぜ戦争（満州事変）を支持したのかという内容も取り上げることによって、より包括的に理解するための教育内容も組み込みたい。それによって、戦争の発生と拡大の背景を理解することができ、ひいては二度と戦争をおこさないために我々は何をすべきかということを思考する材料となる授業プランを作成できると考える。

2-2 先行研究の検討

辻賢二は、民衆の「排外熱」「好戦論」という視点から満州事変の授業を中学生に実践している。辻は「(民衆は一引用者) どのように加担させられていったのか、どんな役割を民衆は果たしたのか—といった点を十五年戦争学習にしっかりと位置づけた実践をする必要があるのではないかと考えます」¹²と述べ、小学生児童の慰問作文や当時の新聞に掲載された市民の感想、満州事変に関する新聞記事などを教材として提示している。慰問作文や市民の感想を見た生徒は、「戦争賛成なんか信じられへん」といった感想を記述している。だが、満州事変に関する新聞記事を読み、「『シナ軍満鉄爆破』と伝えられたら、やっぱりもつとしろと言うのはあたりまえだと思う」「ぼくもこの時代に生きていたら、そらぼくも市民の言ってることはあたりまえと思っていると思う。なぜなら、新聞やラジオなどで『支那軍が満鉄を爆破した!』というような記事を見たり聞いたりしてたら、ほとんどの人がうたがわないと思う」などといった認識を形成している。また、ある生徒は「戦争がおころうとしたら、私たちが積極的に反対していかないと…」という当時の民衆に対する批判的な分析を行っている。

この授業は、「『天皇も悪いが民衆も悪い』式の『一億総懺悔論』に陥ることなく、戦争と

11 十五年戦争論に関しては異論も唱えられている。塘沽停戦協定の後、一応の平和な期間が存在したという不連続説である（たとえば白井、秦ら）。しかし、この不連続説は塘沽停戦協定後から盧溝橋事件までの期間にいわば相対的安定期にあった日中関係が、なぜ戦争状態へと転換したのかについて説得力のある議論を展開しているとは言い難いと井上は指摘する。不連続説といえども、危機への転換の過程は結局のところ陸軍の膨張主義を支持する勢力の量的拡大と、これに追従する外務省・政府という図式で描かれている。満州事変以後の危機を鎮静化させながらも、なぜ日本外交が完全な協調路線の修復に成功することなく日中全面戦争に至ったのかという体系的な分析が欠けている。

12 辻賢二『「満州事変」を教えて一民衆の「排外熱」「好戦論」を生徒はどう見たか—』『日本の歴史 十五年戦争Ⅱ』（1992 新興出版社）p44

民衆の問題を考えさせられるのではないか」¹³ という辻のねらいが、生徒にしっかり受け入れられていると言える。民衆の戦争賛成に驚き、その理由をマスコミが本当のことを書かなかつたからだとなり、政府や軍部が悪いという認識がおおむね形成されている。民衆の戦争支持というテーマは、政府や軍部という子どもにとって想像するのが難しい次元から一段レベルを落とし、自分と同じ「民衆」という立場から戦争を分析するという点で、非常に有効な視点であると思われる。特に小学生の慰問作文については、自分よりも年齢が低い子どもが戦争支持を強烈に表しているという点で、強いインパクトを持つ教材であると言える。本研究においても、辻の実践に学び、民衆という視点を取り入れた授業プランを作成する。

だが一方で、辻自身が指摘しているように、満州を占領したねらいを恐慌の打開のみに求めるのは必ずしも適切であるとは言えない。恐慌の打開と同時に、中国の独立運動の抑制も満州事変のねらいだったからである。

また、民衆の戦争支持が満州事変に対して、どのような意義をもっているか、どのような位置づけであるかということがやや曖昧である。国民の戦争支持は、軍部が自らの主張を押し通すためのツールとして利用したのであり、事変の拡大を後押しするという役割を果たしていた。このような位置づけによって、満州事変がより鮮明に見えてくるのである。

3. 教育内容構成および教材構成

本章では、満州事変の教育内容構成および教材構成を試みる。満州事変の特質は何か、どのような点が近代日本の戦争史を学ぶというテーマについて象徴的であるかという点から教育内容を構成し、それをどのように楽しく分かりやすい授業にするかという観点から教材を構成する。

3-1 教育内容の論理構造と骨子

江口は満州事変について「既存の対外針路と政治体制への暴力的な攻撃によって開始され、流血のテロ・クーデターをとまって展開された」¹⁴ と指摘する。そして、その背景を「二面的帝国主義論」という論法で説明している。「二面的帝国主義論」とは、軍事力では大国だが、経済的には脆弱であるという当時の日本の状態を説明する論法である。それゆえに、当時の日本には対外方針をめぐる2つの主張の対立が存在した。すなわち、米英をはじめ中国を含めた国際協調外交を主導する政府側と、米英依存からの脱却を図り、その手段として満蒙特殊權益を武力で獲得しようと主張する野党・軍部側の対立である。1920年代の日本は、ベルサイユ＝ワシントン体制の下で、政府が主導する協調外交（通称幣原外交）を行っていた。ところが、1930年の初頭から、この協調外交に対する批判が勢いを増していく。恐慌、中国のナショナリズム運動による「満蒙の危機」が叫ばれ、そのような状況下で関東軍が満州鉄道を爆破した。政府は不拡大方針を打ち出すものの、曖昧な対応策により事態の拡大を許してしまう。このような政府の曖昧な対応策の要因として、大日本帝国憲法における政軍関係のシステムの欠陥が

13 辻賢二『『満州事変』を教えて一民衆の「排外熱」「好戦論」を生徒はどう見たか―』『日本の歴史 十五年戦争Ⅱ』（1992 新興出版社）p45

14 江口圭一『十五年戦争研究史論』（2001 校倉書房）pp.9-10

挙げられる。大日本帝国憲法に規定されたシステムは、軍部の暴走を止める機関が存在しないという（致命的な）欠陥を有していた。また、政府要人を狙うテロ・クーデターも政府の対応に影響を与えていた。

さらに、江口は満州事変の特質をもう一点指摘している。「ファシズムの権力といえども、国民から一定の支持を獲得することなしには成立しえないし、また、みずからを維持することもできない。いいかえれば、もっとも赤裸々な暴力的支配を特質とするファシズムもまた、他の権力と同様に、国民に対する精神的・思想的支配を必要とする」¹⁵と述べ、「日本ファシズムの場合、この精神的・思想的支配は満州事変を契機として排外主義が強力に形成されたことを通じて確保されていった」¹⁶と指摘する。国民の間に戦争反対の動きがほとんど見られず、むしろ戦争を支持するような状態が見られた。これが、満州事変の大きな特質であると言える。

以上のような特質を鑑みると、満州事変の教育内容として、以下のような骨子を設定することが可能である。

①日本は協調外交という対外方針を主導しながらも、内部では相反する2つの対外方針に関する主張が存在した。それは、二面的帝国主義という経済的に脆弱な立場によって発生したものである。満州事変とは、現状打破派（軍部）が現状維持派（政府側）を押しつける形で行われた。

②大日本帝国憲法に規定されたシステムは、軍部を抑止する機関が存在しないという欠陥を有していた。それが顕著に表れたのが満州事変であった。

③（②の結果として）軍部（関東軍）の暴走に対し、政府の抑止力が機能せず、逆に政府は軍部の既成事実を圧倒され、事態の拡大を容認してしまった。

④民衆はマスコミを中心とする「満蒙の危機」というスローガンに幻惑され、戦争を積極的に支持した。

①に関しては、2つの対外方針の発生要因と攻防の具体的内容を理解することで、当時の日本がおかれた状況を理解できる。また、単に直線的に戦争が遂行されたのではなく、様々な抗争や妥協を繰り返した結果、戦争に至ったということが分かり、何が問題であったかということをも具体的に考える材料となる。

②に関しては、当時の政軍関係について、天皇の権力の性質・軍令と軍政の曖昧な役割分担・統帥権独立といった内容によって、軍部を抑止する力（たとえば現在のシベリアン・コントロール）が存在しなかったことが陸軍の暴走を招いたことを理解させる。

③に関しては、史実を理解することを中心課題とし、政府・天皇が事態を容認していった具体的な過程を理解することを目的とする。

④に関しては、まず世論の排外主義熱を作り上げたマスコミの役割に焦点を当てる。また、

15 江口圭一『日本帝国主義史論』（1975 青木書店）p149

16 江口圭一『日本帝国主義史論』（1975 青木書店）p149

そのようなマスコミの報道と満州事変によって、一般民衆の中に具体的にどのような意識が作り上げられたかを提示する。

3-1-1 二面的帝国主義と2つの対外方針

満州事変という史実を学ぶには、その直前まで行なわれていた協調外交がなぜ（いとも簡単に）瓦解したのかということの背景を知る必要がある。これを説明する説得力ある論理が、江口圭一の主張する「二面的帝国主義論」である。当時の日本には「現状維持派」と「現状打破派」という2つの相反する対外方針の立場があり、後者が前者を押しつける形で路線の転換が行なわれたのである。したがって、この2つの路線の対立の過程を注視することにより、満州事変が発生・拡大した背景が見えるのである。そこで、満州事変前夜の1920年代に焦点を当て、どのような教育内容によって満州事変の背景を理解させられるのかを検討してみたい。

1930年代初頭の日本は、軍勢力では世界三強に列するほどの大国になっていた。しかし経済的に見ると、日本は非常に不利な国であった。第一次世界大戦は、戦争が人的・物質的資源を莫大に消費することを証明したが、この国家総力戦を遂行する体力は日本には存在しなかった。たとえば、石炭の生産額はアメリカが全世界の生産高の43.89%、イギリスが18.21%であったのに対し、日本は2.6%である。鉄鋼ではアメリカが45.9%、ドイツが13.6%に対し、日本は1.5%である。また、輸出に関しても、日本にとって、唯一のオリジナル商品である生糸の輸出先としてアメリカ市場が死活の意義をもっていたが、アメリカにとって生糸は化学繊維によって代替しうるものであった。（江口 2001）したがって、日本の立場は不安定なものであった。経済・財政面で米英に依存していたため、米英の動向や景気変動に強い影響を受けた。このような状態に対し、2つの立場が1920年代から形成された。

一方は、米英に対する依存はやむを得ないと認め、アジアでの覇権は米英と争いつつも、それが敵対関係にまで発展するのは避け、米英との協調を保とうという立場である。これは具体的にはベルサイユ=ワシントン体制に順応する現状維持的立場であり、天皇、与党民政党的方針、すなわち幣原協調外交という方針である。もう一方は、米英に対する依存を克服するために、アジアでの自給自足圏を建設する、そしてそのためには米英との対決も辞さないという立場である。これは具体的には、ベルサイユ=ワシントン体制に反発する現状打破的立場であり、陸軍や野党政友会の立場である。1920年代は前者が主流の位置を占めた。だが、1929年に始まる世界恐慌を境に、後者の現状打破的立場が急速に力を得ていくこととなる（江口 1982）。

しかし、満蒙問題を武力によって解決するには厚い壁が存在していた。まず、天皇の裁可を得ることである。ロンドン海軍軍縮条約の締結に成功した民政党内閣に対する天皇の信任は厚かった。彼らの前には政党政治と協調外交という厚い壁が立ちはだかっていた。また、国際連盟やアメリカの反応も障害となっていた。国際連盟とアメリカが対日経済制裁に踏み切れば、昭和恐慌にあえいでいた日本経済はひとたまりもなかった。そこで、軍部はこれらの障害の切り崩しを行った。

3-1-2 陸軍の暴走を許した大日本帝国憲法下の政軍関係

協調外交を主導する政府に対して、軍部が現状打破的な立場をとり、後者が前者を押しつける形で満州事変は拡大した。しかし、この史実の提示のみでは、子どもは「なぜ軍を止めなかったのか」という疑問を持つであろうことは明らかである。したがって、陸軍の暴走を許し、国

家全体が戦争へと傾斜していく過程に対するシステム論からの説明が必要となる。

森茂樹は大日本帝国憲法下の政策決定メカニズムを説明している。「そもそも明治憲法体制の下では国家の政策全体を統轄する指導者は存在せず、統一的な国家戦略の形成は困難であった。天皇は強大な権限をもっていたが、天皇への情報伝達と天皇からの命令の経路は内奏や副署という形で輔弼者にコントロールされており、独自のリーダーシップの発揮は望むべくもなかった」¹⁷。このような状況下では「最初の一撃」によって国家諸機構はその方向に向かっていく。そして、「当時の対外政策は満州事変の『一撃』によってすでに方向を定められていた」¹⁸のである。

また、額満厚は統帥権独立性という近代日本の政軍関係から説明する。額満は「統帥権独立性は戦前日本の戦争指導に決定的な役割を果たしたばかりでなく、一九三〇年代における軍主導の政軍関係への変容に決定的な役割を担った」¹⁹と指摘している。統帥とは、大日本帝国憲法の第11条「天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス」に由来している。1930年に発生したロンドン海軍軍縮条約締結の際における統帥権干犯論争の中で、参謀本部は「統帥の本質が用兵にあることを前提にしながら、用兵に関連する訓練や編成等も、ある程度統帥の範囲に入ること示唆（傍点一引用者）している」²⁰が、1932年に作成された陸軍大学校の教科書『統帥参考』では、「軍隊の動員、出動命令、指揮運用等の軍令事項だけでなく、軍隊の編制、教育訓練、軍紀維持等の軍政事項をも統帥権に含まれるとする完全な拡大解釈が定着している。つまり、ここで言う統帥権とは軍令権と軍政権の両方を併せ持つ権限と断定したのである」²¹。この拡張解釈の過程は、そのまま軍部が政治的発言力を増大していく過程でもあった。

統帥権の拡大解釈の進展に伴い、統帥権独立制についても同様のことが言える。軍事事項の軍政事項は国务大臣の補佐によって施行され、軍令事項は参謀本部・軍令部に軍令権とその責任があるという制度であったが、「しだいにこれが軍事の政治一般からの独立、戦略の政略からの独立、すなわち『政軍分離制』あるいは『兵政分離制』と解釈されるに至」²²った。軍部内において統帥権独立制とは、行政権と統帥権との平等性、機制的には政府からの統帥部の独立としてとらえられた。このように、政府と統帥機関とを対立的な平等の地位の關係に位置づけたことは、「将来において『統帥機関』が独自の行動を起こす余地のあることを明らかにしたものであった」²³。ハンチントンはシビリアン・コントロールを「政治上の責任と軍事上の責任を明確に区別することであり、また後者の前者に対する制度的な従属である」²⁴と定義しているが、「近代日本における政軍関係において文民による軍隊統制という意味におけるシビリアン・コントロール（文民統制 civilian control）あるいはシビリアン・シュプレマシー

17 森茂樹『大陸政策と日米開戦』『日本史講座 第9巻』（2005 東京大学出版会）

18 森茂樹『大陸政策と日米開戦』『日本史講座 第9巻』（2005 東京大学出版会）

19 額満厚『近代日本政軍関係研究』（2005 岩波書店）p284 関係の研究』（2005 岩波書店）

20 額満厚『近代日本政軍関係の研究』（2005 岩波書店）p284

21 額満厚『近代日本政軍関係の研究』（2005 岩波書店）p284

22 額満厚『近代日本政軍関係の研究』（2005 岩波書店）pp.284-285

23 額満厚『近代日本政軍関係の研究』（2005 岩波書店）p285

24 サミュエル・ハンチントン（市川良一訳）『軍人と国家』（1978 原書房）p160

（文民優越 civilian supremacy）という関係は成立し得なかった」²⁵のである。

したがって、政軍の分離とそれによって生じた統轄する者の不在、軍令と軍政に関する拡大解釈（をする余地があったシステム）が陸軍の暴走を招き、満州事変の「一撃」によって国家システムの弱点を露呈し、回帰不能な地点まで至ったのである。

3-1-3 柳条湖事件の勃発と事変の拡大

1931年9月18日、関東軍が謀略により満鉄を爆破し、中国軍と戦闘状態に入った。政府にとって、この事件はまさに不意打ちであった。19日には朝鮮軍司令官林銑十郎から参謀総長宛に、関東軍を支援するために朝鮮軍が出動準備中である旨の電報が入った。これは事件発生前からの関東軍との打ち合わせどおりの行動であった（瀬郷 2005）。

19日に陸軍省と参謀本部の合同会議が開かれ、関東軍および朝鮮軍の行動を支援することで一致した。しかし、外務省には事件が軍部の独断であること、現地の関東軍が今後も積極的な軍事行動を企画している様子であることが伝わっていた。19日の政府の緊急会議では、南陸相が今回の行動は自衛的措置である旨を発言した。これを受ける形で、臨時閣議は「政府ハ事態ヲ拡大セシメサル様極力努ムルノ方針ヲ決シ陸軍大臣ヨリ同一趣旨ヲ関東軍司令官ニ訓令セリ」と決定した。つまり、この時点で「事件不拡大」は、関東軍の行動を暗に支持する軍中央の動きを事実上否定するような閣議決定に達していたのである（瀬郷 2005）

政府が閣議で不拡大を早々に決定したことは、戦闘の拡大と朝鮮軍の派兵を企画していた参謀本部に少なからず抑止効果をもたらした。参謀本部は、度重なる関東軍司令官からの朝鮮軍派兵要請を棚上げにした。参謀本部は政府と歩調を合わせることが得策だとする考えを強く抱いていた。しかし、朝鮮軍は天皇の允裁を得ないまま独断で関東軍の支援に向かう。天皇の允裁を得ないまま、勝手に軍隊を動かすのは天皇の統帥権を干犯するものである。ところが、閣議は朝鮮軍の出動に対し予算をつけてしまう。天皇もこれを容認した。関東軍参謀石原莞爾の「謀略により機会を作成し、軍部主動となり国家を強引する」という方策はみごとに奏功した。

3-1-4 ジャーナリズムと国民の戦争支持

江口は「満州事変をめぐるもっとも深刻な問題の一つは、日本国民のあいだに戦争反対の動きがほとんどなく、むしろ挙国的な戦争支持がみられたことである」²⁶と指摘する。軍部にとって世論の戦争支持なしに満州事変を拡大させていくことは非常に困難であった。逆に言えば、満州事変の拡大を実現させ、対外方針を反転させた大きな要因となったのが世論（＝一般民衆）だと言うことが可能であろう。したがって、世論の排外主義熱がどのように形成されたかということを経済内容とすることによって、対外政策の路線転換を可能にした過程を学ぶことができる。また、民衆が戦争に協力していった過程を理解させることにより、自分たちも無関係ではないのだという非常に重要な認識を形成できると考える。

1930年12月1日付『大阪毎日新聞』は一面トップに「わが満蒙政策一破綻の危機に直面」という大見出しを掲げたように、30年末から31年初頭にかけて、鉄道問題を焦点とする満蒙

25 瀬郷厚『近代日本政軍関係の研究』（2005 岩波書店）p.25

26 江口圭一『十五年戦争の開幕』（小学館 1982）pp.339-340

問題が日本帝国主義の直面する最も重要事項の一つとして注視され宣伝された（江口 1975）²⁷。しかし対満蒙政策や中国外交に関して強硬論はまだ世論を支配していなかった。新聞はむしろ、協調外交を基盤とする対話による解決を支持し、武力による強硬論に対してはかなり批判的態度であった。また、何より強硬論は国民をとらえていなかった。国民は満蒙問題にそれほど関心を示さず、内政問題すなわちいかに恐慌から身を守るかということに注意を向けていた。しかし、時間が経つにつれて、世論の空気が微妙に変化し始める。軍部による国防思想普及運動も大きな役割を果たした。軍部が31年8月から10月にかけて1800回以上165万人を動員した講演会を開催し、聴衆を強行論へと傾斜させた。また、新聞の論調も強硬論に屈折し始めた。東京日々新聞は「聞け！在満邦人のS・O・S 亡び行く我權益の輓歌を」（31.8.28）、「危し！！日本の満州における生命線 根深い奉天派の排日」と危機感をあおり、大阪毎日新聞（31.9.17）も「満蒙權益の擁護」という社説で強硬論への屈折を示した。²⁸

満州事変勃発直後から、空気は完全に変わった。中国の排日はとどまるところを知らず、ついに生命線である満鉄線路を不法・卑劣にも破壊した、といった錯覚を新聞は作り上げた。東京日々新聞は「機をあやまらざりし迅速なる措置にたいし、満腔の謝意を表」し、「あくまで支那の非違を責め、支那の反省改悟するまで、その手をゆるめ」るなどさけび、「重ねて政府のあくまでも強硬ならんことを切望」した。大阪毎日新聞の社説は関東軍の行動を「当然の措置」としつつも、全面的衝突の回避を望み、ブレーキをかけたのもつかの間、国際連盟やアメリカの介入の動きが見られると「必要以上もしくは以外の行動に出でない」「局外者よりかれこれ非難されるべきではない」と開き直った。報道合戦は加熱した。戦争ほど新聞が儲かるときはない。しかし、それほど多くの情報があるわけではないので、新聞は軍部の思うままの情報を伝えていった。

このような新聞をはじめとする世論の排外主義熱の高まりを検証するのに効果的な材料として、子どもの慰問作文を提示したい。これから紹介する2つの慰問作文から、当時の世論の排外主義の高まりが分析できる²⁹。

大君の御為に

神戸市明親小学校高等一年生 近澤カネ

寒風吹荒ぶ満州の原野に、国のため、私達のために働いて下さる兵隊さんに深く深く感謝します。暖かい内地でも冬が来て、寒さが身にしみて参りました。それにつけそちらの寒さはいかばかりかと思われます。

先生に伺へば、満蒙の地は我国にとってどうしても離されぬ大切なところださうでございます。それに私達の父祖は、日清日露の両役に二度までもここに尊い血を流し、幾多の尊き屍を埋めて居ります。この大切な地、この尊い地をあの惨逆な無道な人々にどうしてむざむざ踏み

27 1920年代に中国では、半植民地支配からの民族解放を目指すナショナリズム運動が起こった。中国は日本への対抗手段として、両国間の取り決めに無視して満州鉄道に並行する鉄道を開通させた。世界大恐慌の影響もあって、満州鉄道の経営は大きな打撃を受けた。

28 当時の大手新聞社の発行部数は、『大毎』150万部、『東日』『大朝』『東京朝日新聞』それぞれおよそ100万部。ちなみに日本の当時の人口は約7000万人。

29 この慰問作文に関する内容は、『日本の歴史 十五年戦争Ⅰ』（歴史教育者協議会編 1992 新興出版社）における江口の論に依拠している。

にじられて宜しいでせうか。

どうぞどうぞ私達の祖国のため、父祖のため、いえいえわが一天万乗の大君の御ために、あくまであの非道な敵と戦って下さいませ。内地に留まっている者は、誰も彼も皆あなた方をたよりにしています。

「一太郎ヤーイ」を聞きつつ

大津市南小学校尋常五年生 大井豊

お国の為に満州で目ざましい活動をして居らっしゃる兵隊さん。満州はこの頃零下何十度いふ僕達が想像する事も出来ない厳しい寒さと聞いて居ます。そのきびしい寒さと闘ふだけでもずい分つらい事でせうとお察し致しますのに、其上ずい支那の兵隊や馬賊が何時手向ひして来るかも知れないので何時も引きしまって居らねばならず、又或時は敵は大勢、味方は劣勢で如何に強い日本の兵隊さんも、ずい分苦戦されたお話や、凍傷で手足を切り取られた事や、涙ぐましい数多のお話を先生から伺ったり、ラジオで聞いて兵隊さん達の苦勞なされる有様を思ふと、思はず目頭が熱くなります。満州は日清、日露の戦ひで多数の兵隊さんの貴い血を流した所で、広い広い荒野原をたくさんの資本と多くの人の骨折とで大へんよい所にしたのだと聞きました。それなのに支那の悪い兵隊は日本人を満州から追出さうとして、ひどい目に合はせるとは何と言ふ乱暴な人達でせう。この大切な満州を大和魂でかたまった強い強い兵隊さん、どうぞしっかり守ってください。

この2つは、1932年1月24日に大阪朝日新聞が小学校児童から募集した慰問作文の入選作品の一部である。子どもの情報源は大人であり、この作文には当時の大人の意識がそのまま子どもを経由して表されていると言えるのではないか。子どもは大人の鏡である。慰問作文を通じて伺える意識を江口は3点指摘する。第一に、入選した作文の大半に「寒さ」への言及があることだ。苛酷な環境で戦う同胞への連帯の感情に根ざしている。第二に、中国に対する侮蔑ないし憎悪の感情である。中国への蔑視と敵意も過半数の作文に共通する。中国に対する侮蔑感や優越感が民衆の中に浸透していると言えよう。第三に、「大切な地」「尊い地」としての満州への執着である。しかも、単に満蒙權益を擁護しようというのではなく、満州そのものが日本のものであるという観念が強固に形成されており、「満蒙の危機」キャンペーンが浸透していることを示している。この作文を授業の中で提示したい。小学生が書いたことを伝え、大人の手が入っていることに気付かせ、当時の大人がどのようなことを考えたかを読み取らせたいと考えている。

3-2 授業プラン「満州事変 ～発生と拡大～」の教材構成

3-1で述べた教育内容に沿って、授業プラン「満州事変 ～発生と拡大～」の教材化を行った。本節では、教材構成（問題群作成）における各問題のねらいとそれを反映させた問題の内容を紹介する。以下の表は、本授業プランの構成を示している。表以降は、問題作成の論理を説明する。なお、具体化した授業プランについては、本稿末尾に掲載されている。

□ 1 時間目

●問題 1－解説 1	
・ねらい	軍事力の維持には資源が不可欠であるという二面的帝国主義を理解するための前提知識を理解させる
・内容	1920年代の日本の状態を提示し、軍事力が強いためにはどんなものが必要かを問う
●問題 2－解説 2	
・ねらい	二面的帝国主義論の理解。強大な軍事力と輸入に頼らざるを得ない経済状況という二面性を理解させる
・内容	軍事力維持のための資源が当時の日本に存在したのかを鉄鉱と石油を例に問う
●問題 3－解説 3	
・ねらい	政府による協調外交志向と軍部の満州獲得というねらいを、満州の資源に焦点を当てて理解させる
・内容	資源の乏しさゆえに協調外交を志向した政府に対して、陸軍はどう対立したかを問う
●おなはし「なぜ満州にこだわったか ～満州は日本の生命線～」	
・ねらい	中国の（正当な要求としての）排日運動と「満蒙は日本の生命線」であるという意識が満州への固執の要因となったことを理解させる
・内容	満鉄に平行して作られた鉄道を材料に、中国の排日運動と日露で獲得した満州へのこだわりを説明する

□ 2 時間目

●問題 4－解説 4	
・ねらい	問題 7 の布石。大日本帝国憲法下における政軍関係の特質（統帥権と統治権の分離、天皇の権力の実質、軍政と軍令の分離など）を理解させる
・内容	大日本帝国憲法下と日本国憲法下における政軍関係のちがいを問う
●問題 5－解説 5	
・ねらい	政府が「不拡大方針」を発し、朝鮮軍による応援要請を遮断したことを理解する
・内容	柳条湖事件の概要を提示し、内閣の反応を予測させる
●問題 6－解説 6	
・ねらい	内閣・天皇ともに軍部に圧倒され、事態の拡大を容認したことを理解させる。また、テロが軍部批判を抑制したことを理解させる。この段階で、満州事変が 33 年まで続いたことを提示する
・内容	朝鮮軍の独断出兵の史実を提示し、内閣・天皇の反応を予測させる

□ 3 時間目

●問題 7－解説 7	
・ねらい	政軍関係の特質（統帥権と統治権の分離，天皇の権力の実質，軍政と軍令の分離など）が軍部の暴走を招いたことを理解させる
・内容	大日本帝国憲法下における政軍関係を再掲し，陸軍の暴走を招く欠陥の箇所を問う
●問題 8－解説 8	
・ねらい	マスコミによる過熱報道や中国人への侮蔑感，満州に対する誤った認識が軍部への熱狂的支持を醸成したことを理解させる
・内容	大日本帝国憲法下における政軍関係を再掲し，陸軍の暴走を招く欠陥の箇所を問う

問題 1 は二面的帝国主義論を理解する（問題 2）ための前提として位置づけた。1920 年代の日本が、（現在と比べて）広い領土，強大な軍事力を有していたという事実を提示した上で，強大な軍事力を維持するためにはどのようなものが必要であるかを問う導入的な問題である。解説は，“兵器→資源”という内容である。様々な意見が出されるであろうことが予想される（「武器」「兵器」「人」「金」「食料」「やる気」など…）が，「武器」「兵器」という意見が出れば，それを拾い上げて，「何でできているのか」「動かすには何が必要か」といった問いを授業者が出せば，生徒の考えを資源につなげられる。また，「金」が出れば「何を買うために？」と問うことで，生徒の考えを「兵器」につなげられる。

問題 2 は二面的帝国主義の理解をねらいとする。問題 1 で得た知識を前提に，資源が当時の日本に存在したのかを鉄鉱と石油を例に問う。形式はアメリカと比較した数値の予想（選択肢）という形式にした。解説では，いかに日本の資源が少なかったかということを提示した上で，強大な軍事力を維持するために米英から資源を輸入していたという事実を理解させる。

表 1：1920 年代の日・米・英の鉄の算出・生産高³⁰

資源 \ 生産量	日本の生産量（輸入量）	アメリカの生産量 イギリスの生産量	世界全体の生産量
鉄鉱（産出高） （1926～28 年平均）	15 万トン（128 万トン）	6400 万トン 1140 万トン	不明
銑鉄 （1926 年）	81 万トン（50 万トン）	3900 万トン 610 万トン	7800 万トン
鋼 （1926 年）	150 万トン（118 万トン）	4900 万トン 780 万トン	9300 万トン

※鉄は，鉄鉱→銑鉄→鋼の順に作られていく

30 この表は

参謀本部編纂『満蒙資源要覧』（1932 兵用図書株式会社），

猪間驥一『日本経済図表』（1930 日本評論社）

猪間驥一『世界経済図表』（1930 日本評論社）

科学技術庁資源調査会編『日本の資源』（1962 ダイアモンド社）の 4 書より作成。

表 2：1920 年代の日・米・英の石油・石炭の算出・生産高³¹（石油は概数を表示）

資源 \ 生産量	日本の生産量（輸入量）	アメリカの生産量 イギリスの生産量	世界全体の生産量
石油（産出高） （1930 年）	約 50 万トン（約 600 万トン）	約 1 億トン 不明	約 2 億トン
石炭 （1926～28 年平均）	3296 万トン（250 万トン）	5 億 5 千万トン 2 億 3 千万トン	12 億 4 千万トン

問題 3 は、まず資源の少なさゆえに当時の政府は協調外交を行っていたのだということを提示し、それに対して陸軍が「軟弱だ」と批判したことを取り上げる。その上で、陸軍がこの状況を打開するためにどのようなことを計画したかを問う。様々な解答が予想されるが、「他国から奪い取る」といった類の解答が（多寡は別として）上がると予想される。解説では、満州を侵略しようとしたという解答を提示した上で、なぜ満州だったのかということを満州の資源の埋蔵量をデータとして掲載し、膨大な資源があると推定されていたことが満州を獲得しようとした理由であることを理解させる。

表 3：日本と満州の資源の比較^{32 33}

日本の石炭産出高（1926-28 年平均） 3296 万トン	満州の石炭産出高 936 万トン	満州の埋蔵量（推定） 16 億～50 億トン
日本の銑鉄生産高（1926 年） 81 万トン	満州の銑鉄生産高 28 万トン	将来見込生産（推定） 50 万～100 万トン
日本の鉄鉱産出高（1926-28 年平均） 15 万トン	満州の鉄鋼産出高 71 万トン	満州の埋蔵量（推定） 8 億トン
日本の石油産出高（1930 年） 約 50 万トン	満州の産出高 不明	満州の埋蔵量（推定） 約 2 億トン

最後の「おはなし」では、満州への執着心を取り上げる。単に資源がたくさんあったからというだけでなく、満州は日露の際に多大な犠牲を出して獲得し、それが排日運動によって危機的状况にあったこと、すなわち「満蒙問題」が満州獲得の背景になったことを理解させる。

31 この表は

参謀本部編纂『満蒙資源要覧』（1932 兵用図書株式会社）、
猪間驥一『日本経済図表』（1930 日本評論社）
猪間驥一『世界経済図表』（1930 日本評論社）
科学技術庁資源調査会編『日本の資源』（1962 ダイアモンド社）の 4 書より作成。

32 この表は

参謀本部編纂『満蒙資源要覧』（1932 兵用図書株式会社）、
猪間驥一『日本経済図表』（1930 日本評論社）
猪間驥一『世界経済図表』（1930 日本評論社）
科学技術庁資源調査会編『日本の資源』（1962 ダイアモンド社）の 4 書より作成。

33 問題 3 の表の作製に使用した参謀本部編纂『満蒙資源要覧』（1932 兵用図書株式会社）の数値の妥当性を検討する必要がある。参謀本部が編纂しているため、プロパガンダとして掲載された数値である可能性がある。それが判明すれば、授業プランにそれを反映し、より深い授業になると考えられる。

表 4 満州鉄道の輸送成績

年月	利用客 (人)
1929. 1	26453
1929. 7	28442
1930. 1	25298
1930. 7	21777
1931. 1	17759

表 5 満州鉄道の営業成績

年	利益 (千円)
1928	42553
1929	45506
1930	21673
1931	12599

問題 4 は大日本帝国憲法下における政軍関係のシステムの理解をねらいとする。陸軍の暴走を招いたシステム上の欠陥を問う問題 7 の布石となる問題である。同時に、後の問題 4，問題 5 で出てくる「統帥権」などの基礎的知識を与えるためにも、この位置に問題 4 が必要であると考え。まず、大日本帝国憲法下では、天皇は許可を与える立場だったことなどを解説し、過去と現在の政軍関係の差異を問う。生徒にとってはやや突飛で、「難しい」と感じる内容であることが想定されるが、いくつか解答に繋がるような意見が出てくると思われる。解説では、統帥権と統治権の分離・軍政と軍令の分離を提示する。

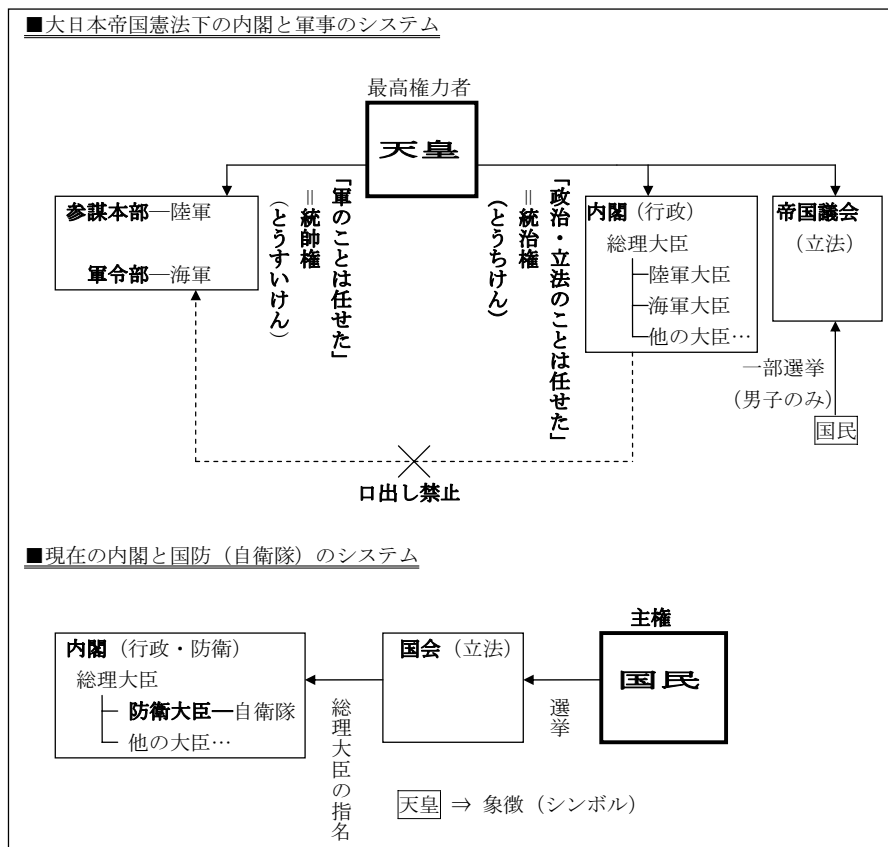


図 1 大日本帝国憲法下の政軍関係および現在における内閣と国防の関係

問題5は史実を予想させる問題である。関東軍が満州鉄道を爆破し、それを口実に満州への侵攻を開始したことを提示し、内閣はどう対応したかを考えさせる。問題3および解説3での協調外交の知識をもとに考え、対抗策をとったという類の答えが出てくると予想される。解説では不拡大方針を出し、朝鮮軍の増援を許可しなかったため、関東軍は危機に陥ったことを理解させる。

問題6も史実を予想させる問題である。朝鮮軍が独断で出兵したことを提示し、天皇・内閣がどう対応したのかを考えさせる。この問題は意見が二分すると考えられる。反対したと考える生徒もいれば、容認したと解答する生徒もいるだろう。解説では、内閣も天皇も事態を容認したことを提示する。

問題7は大日本帝国憲法下のシステムの図を再掲し、陸軍の暴走を許すような欠陥がどこにあったかを考えさせる。問題4・解説4の内容および満州事変の史実を理解していれば容易に答えられる問題であり、ねらいとする内容に近い答えが多く出てくると予想される。解説では、統帥権と統治権の分離・軍政と軍令の分離・国家意志決定機関がないといった内容を提示する。

問題8は小学生の慰問作文を教材として国民の戦争支持とその要因を理解させることを目的とする。慰問作文は当時の国民の考えを表しているものと伝えたいので作文を読ませ、「賛成か反対か」「どのような考えから賛成あるいは反対したか」を問う（作文にはふりがなと語注をつける）。様々な解答が記述されることが予想される。解説では、中国人に対する侮蔑感・満州への執着・兵士への連帯の感情を提示する。

4. 授業実践と評価

作成された授業プラン「満州事変 ～発生と拡大～」は、北海道倶知安農業高校において実践された。本章では、授業プランの改定に向けて、授業の実践記録と生徒の解答内容をもとに授業過程を分析し、改定の指針を考察する。また、生徒が記述した感想用紙をもとに、授業全体の評価を分析する。

なお授業実践は、高校3年生の日本史の中で、1時間目を2008年10月21日の6時限目、2時間目を10月23日の1時限目、3時間目を10月24日の2時限目（1時限は50分）に行った。1時間目の出席者は28名、2時間目と3時間目の出席者は27名であった。授業者は授業作成者（奥山）である。

4-1 授業記録と授業過程の分析

※1：＜授業記録＞は、授業の音声データのうち、生徒の発表場面を抽出した

※2：＜（主な）解答の記述内容＞は、生徒全員から回収した授業プランに書かれていた内容を任意で抜粋したものである

※3：Tは授業者、Cは生徒を表す。なお、授業記録の中のアルファベットは生徒の名前を表す。

○1時間目 10月21日(火)6時限目 出席者28名

■問題1 一解説1

<授業記録>

T: それではきいてみます。答えたい人いるかい? はい, じゃあ, K. 何書いたか教えてください。

C: 一番大事な食料と水。

T: 食料と水? ほかに何か書いたかい?

C: ほかに, まず頭の切れる指揮官と…。

T: 頭の切れる指揮官。

C: その軍の団結力。

T: 頭の切れる指揮官とか軍の団結力, これ必要だね。あとは何かあるかい?

C: あとは武器の数とか。

T: はい。じゃあこのぐらいにしとこっか。食料とか水が必要だ, 軍の団結力とか頭の切れる指揮官が必要だ, それから武器が必要だよっていう意見が出ました。もうちょっとこれ掘り下げてみましょうか。武器ってもうちょっと詳しく言うと, どんな武器が戦争では必要ですか?

C: 竹やり。

C: 竹やり?

T: 竹やりもうちょっと後だな。

C: いつの時代だよ(笑)

T: ほかに何が必要ですか?

C: 手榴弾。

T: 手榴弾みたいな必要。そうだね。ほかに?

C: 書いてないんですけど地雷とか…。

T: 地雷とかは必要ですね。

C: 戦車。

T: 戦車とか。

C: あとはなんか, マシンガン銃みたいな。

T: 銃。そうですね。はい, ほかに何かあるかい?

C: あと, 薬とか。

T: 薬。

C: 情報。

T: 情報ね。はい, 分かりました。ほかに何かこれとは全然別のもの書いた人いますか?

C: 違うこと書いた。

T: 何書いた?

C: 資源。

T: ああ, 資源。資源ってもうちょっと詳しく言うとどんなもの?

C: 鉄とか。

T: 鉄とか?

C: 燃料とか。

T: うん。鉄とか燃料とか必要だね。

C: 石油とか必要だよね。

T: ん, 何?

C: 石油必要だよね。

T: うん。さ, いろいろ出てきました。たしかにね, どれも必要なものではありますよね。食料と水なきやだめだし, 団結力なきやいけないし, 武器も必要だし, 資源, 鉄とか燃料とかないといけませんね。ということなんですけど, それでは解説を配ります。全部必要なものなんですけど, 今回の授業では, この中のどこに焦点を当てていくかということで, 解説を配ります。

<解答の記述内容>

16: 武器 (兵器)

13: 人間

10: お金, 食料 (水)

6: 資源 (鉄)

3: 指揮官, 情報

2: 軍の団結力, 薬

<分析>

スムーズに授業の内容に入ることができるよう, 答えやすい問題を第1問に設定したが, 予想通り多様な答えが出た。ねらいは, 資源が必要であることを理解させることであり, 武器から資源に結びつけようと考えていた (武器という答えは出ると想定していた) が, 生徒自身から資源という言葉が出たことは驚きだった。各々の生徒が積極的に授業に参加しており, 第1問としては意味のある問題だったと言えよう。また, 武器について非常に詳細な知識を有している生徒が複数いた。現代の子どもたちの戦争認識を物語っていると言えるかもしれない。

■問題2—解説2

<解答の分布>

① ア0 イ8 ウ16 エ3 オ1

② ア3 イ13 ウ10 エ1 オ0 ?1

<分析>

日本の資源が (アメリカと比較して) 少ないという認識は持っている (「今も無いよね」「鉄は八幡製鉄所があったからけっこうあるのでは」という発言が出ていた) ものの, その少なさは生徒の想像を超えるものであったことが分かる。解説を配布した際「少ない!」という声が出ていた。二面的帝国主義がある程度のインパクトをもって理解されたと見てよいだろう。

■問題 3 一解説 3

<授業記録>

T：それではいろんな人の答えきいてみます。ではですね，C。何て書きましたか？

C：アメリカと戦争を起こして…。

T：うん。

C：その…アメリカの土地を奪う的な。

T：うん。なるほど。アメリカと戦争して土地を奪おうと思った。

C：でもアメリカには勝てないから，勇者だ！

C：勇者だ！

T：はい，という答えが出ました。アメリカと戦争して，アメリカの土地を奪っちゃえと思いましたよと。

C：死ぬー。

C：死ぬぞー。

T：他には何か書いた人いますか？じゃあ，そうですね…K，何書いた？

C：領土を広げて…。

(授業者プランを覗き込む)

T：領土を広げて，鉄や石油が取れるようにした。なるほど。領土を広げて，鉄や石油を取る，だっけ？だよね？これさぁ実は，上の意見と内容は似てるんですよ。アメリカと戦争して土地を奪う，領土を広げて石油や鉄を取るといことなんですけど，じゃあもうちょっと突っ込んでみましょうか。上はアメリカって言ってるんだけど…これどこだと思う？

C：満州。

C：満州。

T：満州だと思う？満州という意見が出ました。

C：中国かもしれない。

C：アメリカー。

T：満州…ほかには？満州以外こっていうのは？

C：上海。

T：上海。

C：香港。

T：香港？

C：マンハッタン。

C：マンハッタンアメリカだろ？

C：パチカン市国。

T：パチカン市国？

C：パチカン市国？（笑）

C：遠いし（笑）

C：そんなとこ奪ってどうすんだよ？（笑）

T：地図に載ってるところでほかに何か書いた人いますか？このぐらいかな？

C：台湾！

T: はい, 台湾ですね。ほかにはいる? こんなもんかな。じゃあ, 領土を広げるっていうような内容以外の答え書いた人いますか? 領土広げる以外の内容。なんかS, 書いてある?

C: 国内総生産を上げる。

T: 国内総生産を上げる。なるほど。国内総生産って何だか分かる?

C: わからん。

C: GDP じゃないの?

T: GDP?

C: グランドドメスティックポイントらしい。

C: えーマジで? (笑)

C: ドメスティックって (笑)

C: 適当だろ?

T: 要はね, 自分の国で何とかできるようにしようってことでいいのかな?

C: そうです。

T: はい。ほかには何かあるかい?

C: 俺やっぱ領土を広げようとした。

T: 領土を広げようとした? どこにした?

C: 満州。

T: 満州。他の答え何かありますか? これくらいかな?

<主な解答の記述内容>

- ・「他の国の自分の国の領地から資源を取った」
- ・「領土を広げて, 石油や鉄がとれるようにした」
- ・「満州を日本の領土にした」
- ・「中国の領土を手に入れて資源を手に入れる方法にいった」
- ・「南満州鉄道で事件を起こして戦争に持ち込む」
- ・「満州で何かした 満州事変」
- ・「ソ連と手をなぜだかつないだ」
- ・「アメリカとイギリスを日本の領土にする」
- ・「アメリカと戦争をした」
- ・「他の国から資源を取る計画をした。たいわん」
- ・「自分の国でまかなおうとする→だけど失敗した」

<分析>

授業者と生徒の間で多様なやりとりがあった。解答の傾向としては、「奪い取る」という趣旨のものが多かった。その中でも, 問題文の中で「地図を参考に」とあったため, 場所を「満州」と特定している生徒が目立った。満州事変という知識を(程度の差こそあれ)有している生徒も見受けられた。また, 満州以外の場所を獲得すると考えた生徒も数人いた。全体として, 武力による獲得を目指したと考えた生徒が大多数であったと言える。

一方で, この問題は考える材料がやや不足していて, “クイズ的”な問題になっていることも否めない。また, 後の問題5との関連だが, 協調外交という史実の印象が薄かった。結果と

して、問題5を考える際に、協調外交という知識を使えない生徒が多かった。直接の因果関係は分からないが、この段階で協調外交をより強く印象付けることが必要だと思われる。

○2時間目 10月23日(木) 1時限目 出席者 27名

■問題4 一解説4

<授業記録>

T: それでは1回手を止めて、いろんな人の話を聞いてみてください。それでは書いたもの何でもいいので発表してください。じゃあ、H、書いたもの何でもいいので発表してもらえますかね?みんな聞いてね。

C: 昔は権力が天皇だったけど、今は国民。

T: はい、それは読み取れますね。権力が昔は天皇にあったよ、でも今は国民にあるよ、はいこれは違うところですね?ほかに何か書いたかい?

C: ほかはまだ。

T: まだ書けてない?たしかに権力、昔は天皇だけど今は国民っていうのが昔と今の違うところですね。ほかに何かあるでしょうかね?じゃあ、M、何か書いた?

C: えっと、大日本帝国憲法…。

T: ん?

(授業者プランを覗き込む)

T: 大日本帝国憲法下の内閣のシステムと現在のシステムが違う。どんなところが違うかと言うと?

C: 今の内閣は、行政、防衛があるけど、大日本帝国憲法の内閣のほうが行政しかない。

T: はい、よく気付いてくれました。そこ違うところですね。今と昔の内閣の違いです。今の内閣って、行政も防衛もやっているけれども、昔の内閣は行政しかやってないよってことだね?それは大きな違いですね。これは見たところ違うところになりますね。ほかに何か書いた人はいますか?K、何か書いた?

C: 参謀本部がなくなって、内閣に吸収された。

T: ああ、なるほど。昔は参謀本部ってありますけど、今は無くなっちゃいましたね。内閣に吸収された。これはたしかにそうですね。参謀本部とかいうところ無くなっちゃいましたよね。これは違うところですね。ほかに何か書いた人?じゃあ、S、何か書いたかい?

C: 昔は最高権力者が、ぼおっとしてるみたいな…。

T: 最高権力者って誰だっけ?昔の最高権力者は?

C: ああ、天皇。

T: 天皇だね。天皇は?

C: 何もしてないんじゃないか。

T: 何もしてないんじゃないか。なるほど。天皇何もしてないんじゃないの。

C: イエスマンみたいな感じ?

T: イエスマンみたいな?なるほど。こんな意見が出ました。ほかに何か書いた人いますか?こんなところかな?

＜主な解答の記述内容＞

- ・「選挙ができるようになった」
- ・「選挙が一部のみ」
- ・「選挙が男子のみ」
- ・「天皇より今は国民が1番えらい」
- ・「権力が昔は天皇で今は国民」
- ・「権力者が国民になっている」
- ・「昔のはむずかしい。今のはかんたん。国民が入っていない。えらい人たちだけできめてる」
- ・「軍のことも総理大臣が決めるようになっている」
- ・「内閣は…今は、行政だけでなく、防衛もある」
- ・「天皇→国民 内閣（行政と防衛） 陸軍、海軍ではなくて防衛大臣―自衛隊
- ・「最高権力者は、ただ上なだけなのか？どう言ったことをしていたかいまいち理解できない」

＜分析＞

やや難しい問題であるため、図を見ながら考え込んでいる生徒が多かった。これまでの問題と比べると、発言のヴァリエーションが少なく、解答にも白紙がやや見受けられた。だが、授業に参加していないのではなく、考えた結果答えを書けなかった生徒が多いこと、後の問題7でこの問題と解説の知識を使って鋭い解答を記述した生徒が多かったことを考慮すると、問題の内容はこのままで良いだろうと思われる。生徒が記述した解答としては、単純に選挙制度の違いを記述しているものが多かった。ただ、問題3と問題5の接続を考えると、「おはなし」の形式にする可能性を検討する余地があるかもしれない。

■問題5―解説5

＜授業記録＞

T：では考えた内容発表してもらいましょうか。はい、じゃあK いってみようか。

C：えっと、まずびっくりしたんだけど、なんかでも…応援した。

T：応援した？はい。びっくりしたと。どうしたかっていうとその後に…。

C：応援した。

T：ということで、1つ出た意見は応援したんじゃないか、関東軍ね。ほかのこと書いた人いますかね？Y、いってみようか。

C：やめさせた。

T：やめさせた。お、ちょっと違う意見出ましたね。応援したんじゃないか、いや、やめさせたんじゃないかという意見が出ました。さ、ほかに何か書いた人？この方向以外に何か書いた人います？関東軍応援したよ、やめさせたよ、それ以外何か書いた人いますか？

C：相談した。

T：誰と？

C：中国と。

T：中国と相談した。なるほど。中国と相談した。どういうふうに、何を相談したの？

C：なんか、どうする？みたいな。

T：どうする？みたいな。中国と相談したよっていう意見が出ました。ほかに何か、これ以外のこと書いた人いますか？

C：手を切った。

T：誰と？

C：関東軍と。

T：関東軍と手を切った。関東軍と手を切ったと。はい。ほかに何か書いた人？だいたいこんなところかな。応援したんじゃない？いや、やめさせたんじゃない？中国と相談したんじゃない？関東軍と手を切ったんじゃないか。

<主な解答の記述内容>

- ・「何やってんのお前等みたいな感じ」
- ・「関東軍と手を切った」
- ・「やめさせた」
- ・「キレた」
- ・「支援した」
- ・「中国に攻撃する」
- ・「中国の内閣と相談した」
- ・「攻撃をやめさせて事件を調査した」

<分析>

問題3で扱った“政府＝協調外交⇔軍部＝強硬論”から考えさせることをねらいとしていたが、協調外交は生徒が考える材料になっていないと思われる。問題3における“協調外交の扱いの強化”という課題（おそらくこの授業プランで最大の課題）が浮き彫りになった。生徒の発言は、「やめさせた」という趣旨のものと「支援した」という趣旨のものにほぼ二分したが、その根拠に協調外交という知識があったとは言い難い。記述内容としては、「やめさせる」という内容が多かったが、「支援した」という内容もそれなりに見られた。

■問題6 一解説6

<授業記録>

T：では、書いたもの発表してもらいましょうか？H，何書きましたか？

C：満州に向かっている軍隊を殺した。

T：おお，なるほど。

C：始末した。

T：満州に向かっている軍隊，朝鮮にいた日本軍だね。満州に向かっている軍を殺したと。こういう答え書いた人どのくらいいますか？満州に向かっている朝鮮にいた日本軍を攻撃した，殺したっていう内容の答え書いた人いますか？手あげてみてください。…けっこういるかな。

C：抑圧した。

C：抑圧した。

T：なるほど。はい，分かりました。ほかに何か書いた人いますかね？これ以外の答え書いた

人いますか？何書きましたか？

C：ここまで来たら、開き直って、やりたいようにやれ。

T：開き直ってやりたいようにやらせろと。はい。

C：俺も開き直りあるかなって思ったけど…。

C：満州って中国でしょ？

C：中国攻めさせようって…。

T：開き直ったよと。お前らやりたいようにやれ勝手に、というふうにやりたいようにやらせたよっていう意見ですね。

C：満州に報告した。

T：満州に報告した？どんな報告したの？

C：日本軍来るから注意しろって。

C：すげえ（笑）

T：満州に報告したよ、やばい来るぞって。

C：最悪だべ。

C：あと、あの、中国の満州を支配しようって…。やるなら俺もやるって。

T：中国を支配する。

C：うまくいったら支配できる。やるならやれって。

T：はい、分かりました。ほかに何か書いた人いますか？これ以外になんかこんなことやったんじゃないっていう人いますか？大体こんなもんですかね。

<主な解答の記述内容>

- ・「日本軍を止めるために軍を送った」
- ・「満州に向かっていてる軍隊を殺した」
- ・「軍には軍を 戦争」
- ・「日本軍をとめた」
- ・「そのまま行かせた」
- ・「ほっといた」
- ・「関東軍の支援のために満州へ向かった」

<分析>

授業の中では、「朝鮮軍を止めようとした」という主旨の発言と「開き直った」という主旨の発言があった。記述内容としては、前者の内容のものが多かった。この主の記述が多いことは、授業者にとってはむしろねらい通りであった。ここで天皇・政府が放任したという史実を、インパクトを持って理解させられるからである。現に、解説を配布した際に、「バカだ」という発言と失笑のようなものが聞かれた。政府・天皇が事態を容認したという史実が、ある程度の印象を持って受け止められたと言ってよいだろう。

○3時間目 10月24日(金)2時限目 出席者27名

■問題7 一解説7

<授業記録>

T：それではきいてみたいと思います。書いたことを何か教えてください。

C：内閣が陸軍に口出しできない。

T：はい。内閣が軍に口出しできないよと。これが原因だよというふうに考えましたよっていうことね。内閣が、軍がやったことにお前らこんなことやんなよみたいなことを言えないよってことです。ほかのこと書いた人いますか？

C：はい！

T：はい。

C：内閣の中で、軍が…今の現在の内閣は、防衛大臣の中に自衛隊があつて、内閣の中で軍が考えているけど、こっちのやつはなんか、内閣と軍が別々で独立してるから、作戦を練る段階で一緒になってないから、なんか勝手にできたみたいなの…。

T：はい。今は内閣の中に自衛隊があるけど、昔は内閣の外に軍があるよってことで…

C：だっておかしいよね、これね。陸軍大臣がさあ、内閣の中にあるのにさあ、参謀本部がさあ、別のところにあるんだよ。

T：おお、なるほど。

C：本部は別ってことだろ？

C：そう、で、口出ししねえんだよ？意味分かんなくない？

C：やりたいようにやれる。

T：今のもう一回言ってくれる？

C：内閣の中に、陸軍大臣とか海軍大臣とか入ってるのに、参謀本部と軍令部が別のところにある。

T：内閣の中に陸軍大臣と海軍大臣がいて。いるのに、参謀本部とか軍令部があると。こんなのおかしいでしょってことだね？という意見が出ましたね。陸軍大臣、内閣の中にいるのに、参謀本部っていう別のものが外にあるってことだね。他に何か書いた人いますか？これとはちょっと違うこと書いたよっていう人いますか？S、何書いた？

C：俺も陸軍大臣がいるのに参謀本部って書いた。

T：これね。大体こんなところかな？

<主な解答の記述内容>

- ・「内閣が軍に口出しできない」
- ・「天皇が陸軍にまかせたことと内閣が陸軍に口出しできなかったから」
- ・「軍のことは軍にまかせて内閣が口出しできない状態になっていたから」
- ・「内閣は参謀本部や軍令部に口出し禁止だったので、陸軍が自分勝手な行動をおこした」
- ・「軍の事は陸軍に任せていたから。天皇が政治の事や軍の事に直接命令したりはしないというシステムだった事」
- ・「内閣が口出し禁止なことや内閣の中で軍が考えるのではなく、内閣と軍が別々で独立して

いて、天皇が許可するだけだから無視できた」

- ・「あいまいすぎた（参謀本部と陸軍大臣の役割） 統帥権」

<分析>

問題4－解説4の内容がしっかりと理解されていることがうかがえる。解説4で示した内容をもとに、授業者の狙いとする内容が発言されている。解答でも、多くの生徒が、授業者がねらいとする内容に近い記述を行っていた。問題4で獲得した知識を生かすことができていると言えるだろう。「内閣が軍に口出しできない」（＝統帥権の独立）という内容が最も多く、天皇の権力（国家の意志決定機関の不在）を記述している生徒も多かった。また、若干ではあるが、参謀本部と陸軍大臣の曖昧さ（＝軍令と軍政の役割分担の曖昧さ）を記述した生徒も見受けられた。生徒たちは、政軍の分離というシステムが満州事変を引き起こした要因となったという認識をある程度形成したと見てよいだろう。

■問題8－解説8

<授業記録>

T：書いたもん何でもいいんで発表してください。えーとね、M、どんなこと書いた？

C：途中までしか書けてない…。

T：途中まででいいよ。読んでみて。

C：満州は。日清日露の戦いで多数の兵隊さんの…。

T：ま、そういうことだね。読み取れる内容こんなことがありますね。満州という土地は、日清の戦争のときにとった大切な土地だよって思ってますね。

C：よくロシアに勝ったよね。

C：艦隊が強かったとかそんな感じじゃなかったっけ？

T：あれはねえ、辛うじて勝ったんだよ。

C：辛うじて？

T：うん。大勝したわけじゃないんだよね。授業終わったらやろう。

C：おし。

T：他に…あ、えーとじゃあKね。

C：俺は反対意見のほうで、なんか文章読んでると…。

T：反対だと思ったと？

C：賛成って言われてるのに（笑）

T：いいよ、いいよ別に。

C：あえて挑戦してるな、お前（笑）

T：言ってみて。

C：目頭があつくなるとか、悲しい話ばかり聞いてるってところから、この子どもだったら、でも本当は、ひどい目にあつて、その兵隊さんたちに、ひどい目にあつてとか書いてあるから、

T：兵隊さんに同情しているみたいな感じ？

C：ひどい目にあつて欲しくないっていうか…。

T：あー、なるほどね。

C：でも、そう思っても、陸軍はもう勝手に戦ったりしてるから、せめてその勝ち取ったところを守って欲しいと思っている。

T：なるほどね。

C：おまえ、そんな他人のことを思いやるような…。

T：Kの意見は、実は満州事変に反対してたんじゃないのかなってことで、理由は、だって兵隊さんひどい目にあってるよって書いてるよってことだね？という意見が出ましたよ。じゃあとりあえずこれね、あとで出終わってからもう一回考えてみましょう。とりあえずいろいろ挙げてみます。ほかに何か書いた人いますかね？あ、はい。

C：日本人は中国人が嫌いだった。

C：俺も嫌いだよ。

T：中国人が嫌いだっていうのはどこの部分で読み取れる？

C：読み取ったというより、今の人たちも大体中国人嫌いだから…。

T：ちなみに、日本人が中国人のこと嫌いなんじゃないかっていうのは、この作文の中でも出てきてるんですよ。どんな言葉で分かるかい？

C：残虐な無道な…。

T：っていうふうに書いてありますよね？残虐とか無道とかね。ずるいとか書いてありますね。こういうことから賛成したんじゃないかと。はい、じゃあほかに何かあるかい？この2つの作文こんなところが同じこと書いてあるよってところでもいいよ？

C：あ、先生あの…、なんでもないです。

C：えーっ！

C：あ、じゃああの…満州の兵隊の人たちもそこから日本人を追い出そうとしてたんじゃないですか？満州の…駅？地下鉄？

C：地下鉄？

T：あ、線路ね。

C：満州の兵隊も追い出そうとしてたんじゃないかなあと。

T：なるほどね。はいはい。この話かな。

C：あれだね、でも、この一天万乗の大君のためによってよほど日本を尊敬してた。

C：アホだね。

T：そうだね。S、何かさっき面白いこと書いてたね？

C：どっちも、これはたぶん冬の季節に書かれたものっていう…。

T：そうだね。どっちも寒いねって話書いてあるよね。満州寒いんだろうねってことで、寒いんじゃないのってことが書いてありますよってことですね。さ、ほかに何かありますか？だいたいこんなところ？ほかに何か書いた人いますか？

<主な解答の記述内容>

- ・「中国人は悪い人で、満州は日本のためにある 中国人は日本人を満州から追い出そうとしている」
- ・「中国人を非道な人だと思っている 満州は大切な地」
- ・「悪者と見ている 日本を応援」
- ・「『ずるい支那の兵隊』『支那の悪い兵隊』という文から日本人は中国人を嫌っていた」

- ・「満州は日清, 日露でとった大切な地 日本人は中国人が嫌い」
- ・「日清日露で苦勞して得た大切な満州から追い出そうとする悪い敵から満州を守って下さい」
- ・「満州の地は日本にとってどうしても離されぬ大切な所だった」
- ・「兵隊さんに感謝している。寒さについて書いている」
- ・「満州がさむい所。満州を守ってほしい」
- ・「目頭があつくなるとか, 悲しい話ばかり聞いているところから, 本当はひどい目にあってほしくないんだと思うけど, 陸軍ががんばっているから, せめて, 守ってほしいと思っているんだと思う」

<分析>

様々な発言・記述があり, 最も盛り上がった問題であった。生徒が引き込まれやすい教材であったと言えるだろう。授業者のねらいは, ①中国人に対する侮蔑の感情, ②満州に対する(誤った)思い入れ, ③寒さを象徴とする日本兵への連帯の感情を読み取らせることであったが, 非常に多くの生徒が3つの内容について発言・記述していた。そんな中, 「反対していたのでは」という生徒の発言が注目される。内容としては③の連帯の感情を示しているが, この生徒は「無理やり書かされたのでは」という意見を持っていた。授業では初めに「賛成か反対か」を問い, 賛成であったことを確認したうえで「どのような考えから賛成したのか」を考えさせるという流れで授業を進行したが, 賛成か反対かも考えさせたほうがより深い認識に至るのではないかと思われる。

4-2 授業全体の評価

3時間目の授業が延びてしまい, 感想文を書かせる時間が2, 3分しか取れなかったため, 一言ずつの感想しか得られなかった。

全体として, 「分かりづらい」「おもしろくない」といった否定的な意見は皆無であった。授業の感想を大まかに述べたものが多かったが, 授業が概ね肯定的に受け入れられたと見てよいだろう。また, 「もっと知りたい」というような感想も見られた。

- ・「楽しい授業でした。わかりやすかったです。」
- ・「わかりやすかった。歴史とかまったく興味なかったけど, すごい歴史があったんだなーと思いました。」
- ・「満州事変のことがよくわかった。歴史を1つ1つこうやって勉強できたらいいと思いました。また授業を受けたいと思った。」
- ・「戦争のことがわかった。でも, 楽しかった。もっと, 知りたいなあ~と思った。」
- ・「とてもわかりやすかったです。もっと授業をうけたかったです。」
- ・「歴史には, 色々な出来事が沢山あって, なぜ?こんな事があったのかわかりました。」
- ・「何か新しい感じで良かった。普段の授業とは違って楽しくできました。」

そんな中でも, 授業の内容について具体的に触れている感想文がいくつかあった。

- ・「日本人が中国人をきらうのは今も昔も変わらないと思った。」

- ・「戦争はやっぱり、国民をせんのうすることが多いと思う。今の北朝せんと、昔の日本は、どこか似ていると思う。だから、あまり強く言えないんじゃないのか、と思う。楽しかった。」
- ・「第2次世界大戦が満州事変をきっかけに始まったということがわかった。」
- ・「昔の行政はメチャクチャだったということが解ったしもう少し考えて行動をした方がよかった。」
- ・「最後の作文が面白かった。」
- ・「歴史はくり返れる（ママ）ようなもんだって言うことがなんとなくわかった。」
- ・「授業を受けて、今と昔のしくみの違いがわかった気がしました。」

また、歴史というものについて深く考察した感想文があった。

- ・「本当の事実は、その時に生きていないとわからない。大事なのは、そのれきしに対して、どう思ってこれからの日本にやくだてるか」

生徒が満州事変という歴史をある程度理解し、歴史を学ぶことが楽しいと感じたと総括できるのではないだろうか。一方で、授業作成者がねらいとした認識をどこまで形成できたかは不明な部分もある。生徒が獲得した認識をより詳細に調査・分析することが求められるであろう。

4-3 授業プランの改訂に向けて

実践の結果、いくつかの課題が浮き彫りとなった。

第一に、問題5において、協調外交という認識を使って考えた生徒が少なかったことである。この原因は主として、問題3から問題5へのつながりにあると考えられる。問題3は二面的帝国主義を前提として、軍部の現状打破的立場を考えさせる問題である。しかし、一方の協調外交（＝現状維持的立場）に関しては、問題の中で説明しただけであった。つまり、政府と軍部の対立的な構造を捉えさせるには、問題3は不十分であるということである。二面的帝国主義という状態に向き合っていた日本の資本主義にとって協調外交は不可欠なものであると当時の政府は判断した。このような内容を生徒がはっきり把握できたとは言いがたい。この内容を把握することによって、政府と軍部の対立の構造をより鮮明に認識することができる。また、政府が真に平和を望んで協調外交を行っていたとは必ずしも言えないのではないかといった考えを発する材料ともなりうる。また、そもそも問題3自体が、考えるための材料が不足していて、クイズのような内容になってしまった感があるのは否めない。授業の中でも、考え込んだり、なんとなく答えを書いたりした生徒が多く見受けられた。

以上のような課題を克服するために、問題3を改訂する必要があると考えられる。改訂の内容としては、①問題3を分離し、協調外交を問う問題を挿入する、②問題3の問題文をより詳細にし、協調外交を強く押し出す、といったことが考えられる。どちらも方向性は同じであり、協調外交の意味と必要性の認識を形成しうるように改訂したい。

第二に、問題8の扱い方である。生徒から「本当は反対していたのでは？」という意見が出た。民衆の戦争支持というのが、満州事変の特質ではあるものの、反対した人間も当然存在した。しかし、それらの人々は治安維持法などによって抑圧されたという事実も一方では存在する。このような史実を「おはなし」の形で取り入れると、より豊かな認識が形成できるであろう。

第三に, 問題 2 を除き, すべての問題を選択肢ではなく記述形式にした。当初, 歴史は選択肢を設定するべきではないと考えたからである。結果として, 考えてはいるもののそれを言葉にできず, 白紙にしている生徒がやや目についた。一方で, 記述にしたほうがより深く考え, 多様な答えが出るという面もあった。しかし, 史実を予想する問題 5, 問題 6 は, 選択肢があったほうがよいかもしれない。政府の対応策は, 選択肢の数がある程度限定的であり, 選択肢をあらかじめ予想させた上で, 理由を問うという形式にしたほうが理解が深まり, 授業自体も活性化すると思われる。

5. まとめと今後の課題

本研究では, 十五年戦争のはじまりである満州事変をどう教えるかという課題を設定した。その方法として, 満州事変の背景を「二面的帝国主義論」, 発生と拡大のメカニズムを政軍関係および民衆の戦争支持という教育内容によって構成し, それを教材化して授業プランを作成し, 実践を行った。結果として, 生徒たちは満州事変, そして十五年戦争がなぜ起こったのかという認識を形成したと考えられる。冒頭で提示した「戦争の科学的認識」という目標を, ある程度達成したと見てよいであろう。

一方で, 本研究は戦争史の教育について, 感性的認識だけでなく科学的認識の裏打ちが必要であるという問題意識のもとで行った。したがって, 対象を科学的認識を形成する授業プランの作成に対象を限定しており, 感性的認識すなわち戦争の悲惨さを伝えるという教育内容については考察していない。しかし, 感性的認識が不必要だと言うつもりは毛頭ない。むしろ, 科学的認識と感性的認識が合わさって, 真の戦争史教育であると言える。満州事変に関しても, たとえばナショナリズム運動における中国人の思いや日本軍が満州の人々の生活を破壊したといった具体的な史実の提示による感性的理解のための教育内容, 言い換えれば戦争を感情的に忌避する心を養成するような教育内容と本研究で作成した授業プランが合わさると, より豊かな認識を形成しうる授業プランとなるであろう。以上を今後の大きな課題としたい。

引用・参考文献

- 『社会科中学生の歴史』(2005 帝国書院)
- 『詳説日本史』(2006 山川出版)
- 安達喜彦「戦争に加担させられた民衆」『日本の歴史 十五年戦争 I』(1992 新興出版社)
- 鮎川伸夫「十五年戦争の学習で何が大事か」『日本の歴史 十五年戦争 I』(1992 新興出版社)
- 家永三郎『戦争責任』(1985 岩波書店)
- 伊香俊哉『満州事変から日中全面戦争へ』(2007 吉川弘文館)
- 井上寿一『危機の中の協調外交』(1994 山川出版社)
- 井上寿一『日本外交史講義』(2003 岩波書店)
- 井上寿一『アジア主義を問いなおす』(2006 筑摩書房)
- 猪間驥一『世界経済図表』(1930 日本評論社)
- 猪間驥一『日本経済図表』(1930 日本評論社)
- 色川大吉『歴史の方法』(1977 大和書房)
- 江口圭一『日本帝国主義史研究』(1975 青木書店)

- 江口圭一『十五年戦争の開幕』(1982 小学館)
- 江口圭一『十五年戦争小史』(1986 青木書店)
- 江口圭一「十五年戦争と民衆の国家意識」『日本の歴史 十五年戦争Ⅰ』(1992 新興出版社)
- 江口圭一『十五年戦争研究史論』(2001 校倉書房)
- 大門正克編『昭和史論争を問う』(2006 日本経済評論社)
- 加藤公明『考える日本史授業2』(1995 地歴社)
- 加藤公明『考える日本史授業3』(2007 地歴社)
- 加藤陽子『満州事変から日中戦争へ』(2007 岩波新書)
- 加藤陽子ほか『あの戦争になぜ負けたのか』(2006 文春新書)
- 加藤文三『歴史教育論の展開』(1973 新日本出版社)
- 加藤文三、本多公栄ほか「一〇〇時間の日本史学習9」『歴史地理教育』1980年12月号
- 神田文人「日本、日本人における戦争責任意識」『アジアの「近代」と歴史教育』(1991 未来社)
- 木坂順一郎『進め一億の火の玉だ』(1993 機関紙共同出版)
- 額満厚『近代日本政軍関係の研究』(2005 岩波新書)
- 小松豊「加害の面を中心にすえた十五年戦争の学習」『日本の歴史 十五年戦争Ⅰ』(1992 新興出版社)
- 参謀本部編纂『満蒙資源要覧』(1932 兵用圖書株式會社)
- 高橋彦博『民衆の側の戦争責任』(1989 青木書店)
- 辻健司『満州事変』を教えて『日本の歴史 十五年戦争Ⅱ』(1992 新興出版社)
- 遠山茂樹「歴史教育と歴史認識」『北海道歴史教室』1979年11月号
- 遠山茂樹『歴史学から歴史教育へ』(1980 岩崎書店)
- 永井和『近代日本の軍部と政治』(1993 思文閣出版社)
- 坂野潤治、宮地正人編『日本近代史における転換期の研究』(1985 山川出版)
- 藤岡信勝『社会認識教育論』(1991 日本書籍)
- 藤原彰「天皇の戦争責任を考える」『日本の歴史 十五年戦争Ⅰ』(1992 新興出版社)
- 前坂俊之『太平洋戦争と新聞』(2007 講談社学術文庫)
- 増田知子『天皇制と国家』(1999 青木書店)
- 松沢弘陽『昭和史』書評『思想』(1959)四二四号
- 松本通孝「歴史教育と『国民の戦争責任』」『アジアの「近代」と歴史教育』(1991 未来社)
- 森茂樹「大陸政策と日米開戦」『日本史講座 第9巻』(2005 東京大学出版会)
- 宮原武夫『子どもは歴史をどう学ぶか』(1998 青木書店)
- 安田浩『天皇の政治史』(1998 青木書店)
- 吉田裕『現代歴史学と戦争責任』(1997 青木書店)
- 吉田裕『日本人の戦争観』(1995 岩波書店)
- 吉田裕、森茂樹『アジア・太平洋戦争』(2007 吉川弘文館)
- 読売新聞戦争責任検証委員会『戦争責任Ⅰ』(2006 中央公論新社)
- 歴史教育者協議会編『アジア太平洋戦争から何を学ぶか』(1993 青木書店)
- 渡辺賢二『満蒙は生命線』とは「日本の歴史 十五年戦争Ⅱ」(1992 新興出版社)
- E. H. カー『歴史とは何か』(1962 岩波新書)
- サミュエル・ハンチントン(市川良一訳)『軍人と国家』(1978 原書房)

満州事変

～発生と拡大～



当時使われていた教科書より

はじめに

今、皆さんは何才ですか？

17才か18才ですね。

突然ですが...

過去の日本で14年間戦争が続いていたと言われたら...信じられますか？

皆さんが3才か4才のときから今まで戦争が続いていたことになります。

そんな戦争が70年ほど前の日本であったのです。

皆さんのおじいさんやおばあさんが子どものころですね。

戦争によって町は焼きつくされ、たくさんの人々が犠牲になりました。

なぜこんな戦争が起こったのでしょうか？

この戦争の始まった歴史を学んでいきましょう。

問題 1

1920 年代の日本は、朝鮮半島（今の韓国・北朝鮮）や台湾、樺太を領土とし、満州の鉄道
の経営も行っていました。これらは、日清戦争（1894 年）や日露戦争（1904 年）のときに、
武力によって獲得しました。

日本はとても強い軍事力を持っていました。1922 年のワシントン会議で、世界の 5 大国の
軍艦の保有量が、

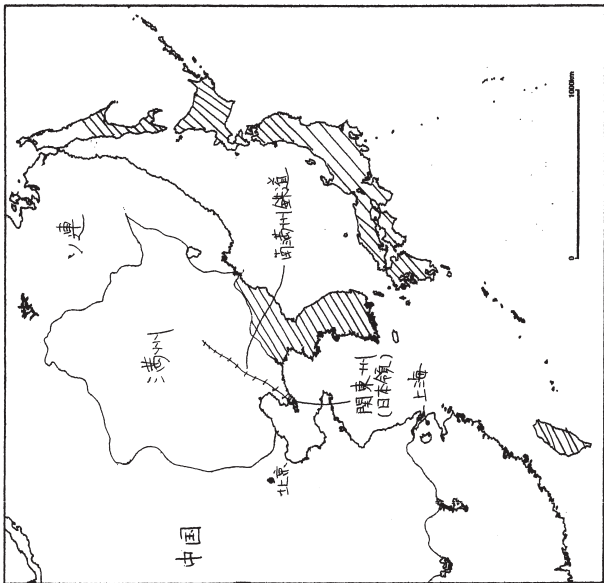
アメリカ 5：イギリス 5：日本 3：フランス 1.67：イタリア 1.67

と決まったことがその一例です（教科書の P112 を読んでみましょう）。日本は世界第 3 位の海
軍力を持っていたのです。

軍事力が強い国であるためには、どのようなものが必要になるでしょうか？ 思いついたも
のを挙げてみてください。

● 必要なもの

■ 1920 年代の日本の領土



※満州は中国の領土

解説1

軍事力が強い国であるためには、戦車や飛行機、軍艦が必要です。軍艦は、兵隊を輸送するという働きもしています。
これらのものは鉄で作られています。あるいは、これらのものを作ったり、動かしたりするには、石油や石炭が必要です。鉄や石油、石炭がないと軍事力が強い国にはなれないのです。

問題2

鉄や石油、石炭のような資源は、当時（1920年代後半）の日本にどのくらいあったのでしょうか？鉄鉱（鉄の原料）と石油を例にして予想してみましょう。（①）（②）に入る数字を予想して選んでみてください。

	日本	アメリカ
鉄鉱（1926年） の産出高	（①） トン ア、15万 イ、150万 ウ、1000万 エ、5000万 オ、1億	6400万トン
石油（1930年） の産出高	（②） トン ア、約50万 イ、約500万 ウ、約5000万 エ、約1億 オ、約5億	約1億トン

解説2 答え：(①) →ア (②) →ア

当時の日本には、鉄も石油も石炭も十分にありませんでした。下の表1を見てみましょう。これは当時の日本の資源の状況です。

表1：1920年代の日・米・英の鉄の算出・生産量¹

資源	生産量 鉄鉱石(産出高)	日本の生産量 (輸入量)	アメリカの生産量 イギリスの生産量	世界全体の生産量
金鉄(金鉄)	15万トン	(128万トン)	6400万トン	不明
金鉄(金鉄)	81万トン	(50万トン)	1140万トン	7800万トン
金鉄(金鉄)	150万トン	(118万トン)	3900万トン	9300万トン
金鉄(金鉄)			610万トン	
金鉄(金鉄)			4900万トン	
金鉄(金鉄)			780万トン	

※鉄は、鉄鉱石→鉄鋼→鋼の順に作られていく

表2：1920年代の日・米・英の石油・石炭の算出・生産量² (石油は噸数を表示)

資源	生産量 石油(産出高)	日本の生産量 (輸入量)	アメリカの生産量 イギリスの生産量	世界全体の生産量
石油(石油)	約50万トン	(約600万トン)	約1億トン	約2億トン
石油(石油)	3296万トン	(250万トン)	不明	
石油(石油)			5億5千万トン	12億4千万トン
石油(石油)			2億3千万トン	

アメリカやイギリスの生産量と比べてみると、日本は資源の乏しい国でした。ですから、日本は軍事力に必要な資源を外国、特にアメリカやイギリスからの輸入に頼っていました。このように、日本はともにも強い軍事力を持っていましたが、経済的には資源を自給自足できず輸入に頼っていました。それが当時の日本の弱さであり課題だったのです。

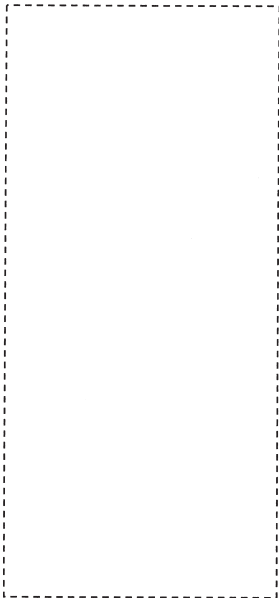
¹ この表は
参謀本部編纂『滿蒙資源要覧』(1932 兵用図書株式会社)、
堀内謙一『日本経済図表』(1930 日本評論社)、
堀内謙一『世界経済図表』(1930 日本評論社)
² この表は
科学技術庁資源調査会編『日本の資源』(1962 ダイアモンド社)の3書より作成
参謀本部編纂『滿蒙資源要覧』(1932 兵用図書株式会社)、
堀内謙一『日本経済図表』(1930 日本評論社)、
堀内謙一『世界経済図表』(1930 日本評論社)
科学技術庁資源調査会編『日本の資源』(1962 ダイアモンド社)の3書より作成

問題3

資源がなかった日本は、アメリカを中心に資源を輸入していました。そこで政府 (当時の与党は民政党という政党でした) は、アメリカをはじめ各国と仲良く付き合っていくという外交を行っていました。これを協調外交といいます。中心となったのは外務大臣の幣原喜重郎 (しではら きじゅうろう) という人でした。天皇も賛成でした。国民も政府を支持していました。また、世界の国々も1914年～1918年の第一次世界大戦を反省し、戦争のない平和な世界を作ろうとしていました。

しかし、当時の陸軍は幣原の外交を『軟弱 (弱腰) だ!』と批判し、アメリカやイギリスからの輸入に頼っている状態を打開しようと考えました。もし、アメリカやイギリスからの輸出が中止されると、日本は強い軍事力を維持できなくなってしまうからです。

陸軍は事態を打開するためにどのようなことを計画したでしょうか? 地図を参考に考えてみましょう。



解説3

当時の陸軍は、資源のたくさんあると推定されていた満州を日本の植民地にして、そこから資源を調達しようと考えました。満州は日露戦争のときに、日本が鉄道の経営権を手に入れた場所です。野党の政友会も満州の資源に興味を持っていました。表2を見てください。

表3：日本と満州の資源の比較³

日本の石炭産出高 (1926-28年平均)	満州の石炭産出高	満州の埋蔵量 (推定)
3296 万トン	936 万トン	16 億～50 億トン
日本の鉄鉱生産高 (1926 年)	満州の鉄鉱生産高	将来見込生産 (推定)
81 万トン	28 万トン	50 万～100 万トン
日本の鉄鉱産出高 (1926-28年平均)	満州の鉄鋼産出高	満州の埋蔵量 (推定)
15 万トン	71 万トン	8 億トン
日本の石油産出高 (1930 年)	満州の産出高	満州の埋蔵量 (推定)
約 50 万トン	不明	約 2 億トン

満州には日本よりずっと豊富な資源があったと推定されていたのです。ところが、日本が満州に持っているのは鉄道の経営権だけです。満州の領土は中国のものでした。そこで陸軍は、満州を武力で日本のものにしようと考えました。そのためには、協調外交を行っている政府とそれを支持する天皇、国民という障害をどう乗り越えるかが課題でした。陸軍は作戦を練り上げていきました。

※1929年にアメリカで始まったひどい不景気は、日本にも拡大しました。もともと景気が良くなかった日本は、さらにひどい不景気となってしまいます。これを昭和恐慌（しょうわきょうこう）といいます。昭和恐慌によって、たくさんの企業が倒産し、数百万人の失業者が出ました。また、農村はさらにひどい状況になりました。ご飯を食べられない人や女子の身売りが急増しました（教科書P138～139を読んでみてください）。満州への侵略の計画は、この不景気を克服するというねらいもあったのです。

³ この表は

参謀本部編纂『滿蒙資源要覧』（1932 兵用図書株式会社）、
猪俣勝一『日本経済図表』（1930 日本評論社）、
猪俣勝一『世界経済図表』（1930 日本評論社）、
科学技術庁資源調査会編『日本の資源』（1962 ダイアモンド社）の4書より作成

なぜ満州にこだわったのか ～「満州は日本の生命線」～

中国では、満州鉄道やその他の土地から日本を追い出そうという運動が激しくなっていました。自分たちの国が侵略されていることへの怒りが爆発したのです。これは正当な独立の主張でした。満州では、中国が満州鉄道の債に鉄道を作りました。満州鉄道の売り上げは急落しました（表3、表4を参考してください）。

表4 満州鉄道の輸送成績

年月	利用客 (人)
1928.1	26453
1929.7	28442
1930.1	25298
1930.7	21777
1931.1	17759

表5 満州鉄道の営業成績

年月	利益 (千円)
1928	42553
1929	45506
1930	21673
1931	12589

満州鉄道は、1904年の日露戦争で大きな犠牲を出して獲得したものでした。ですから、陸軍はもちろんそのほかの日本人にとっても、満州鉄道はとても大切だという思いがありました。その満州鉄道が危ない状態でした。陸軍はなんとしても満州鉄道を守りたかったのです。

このように、満州は日本にとっての「生命線」、つまりなくてはならない大切な地だと考えられたのです。

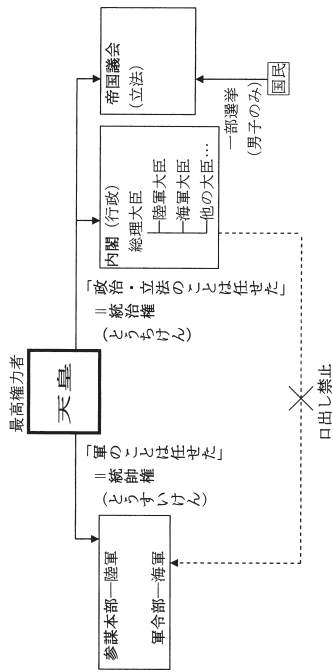
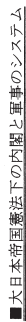
⁴ 江口圭一『日本帝国主義史研究』（1975 青木書店）より複製

問題4

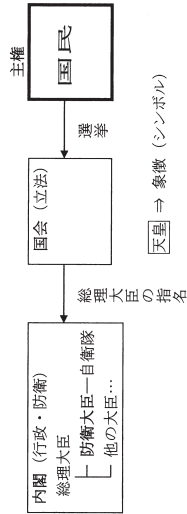
当時の日本では薩摩が政治に対して盛んに発言していました。これは現在では考えられないことです。自衛隊（憲法の意義では「重隊」ではありません）が政治のことに口を出し、自分たちの意見を強く主張することは、現在ではありません。なぜこのような違いがあるのか、それは現在の日本の憲法である「日本国憲法」と当時の「大日本帝国憲法」の内容の違いによるものです。

「大日本帝國憲法」では、天皇が最高權力者でした。そして、内閣に政治のことを任せました（立法のことは帝國議會に任せる）。軍のことは、陸軍を参謀本部に任せ、海軍を軍令部に任せた。天皇はそれぞれの機関からの申し出を許可するというシステムでした。つまり、天皇は最高權力者であるけれども、天皇が政治のことや軍のことに直接命令をしたりはしないというシステムではある。

当時と現在の日本の内閣と軍（防衛）の仕組みが、どのような点で異なっているのか図を参考にして考えてみましょう。思いついたことを挙げてください。



■現在の内閣と国防（自衛隊）のシステム



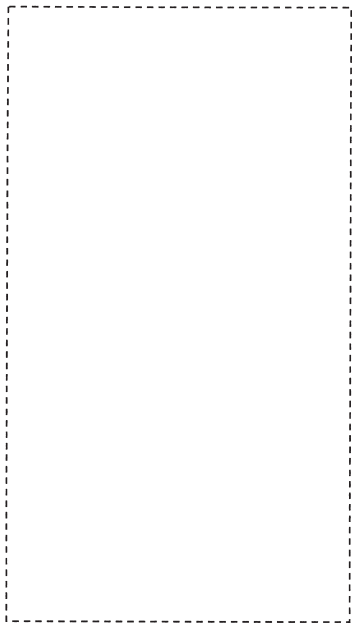
問題4

- ①現在では、自衛隊の統率の内閣の中(防衛大臣)で行われます。しかし、当時は、軍の統率は最高責任者である天皇によって行われます。
- ②現在は内閣の中に、防衛大臣を責任者とする防衛省(自衛隊)がありますが、当時は内閣とは独立した参謀本部(陸軍)、軍令部(海軍)が軍の統率を任されている機関だったことも現在とは異なる点です。当時の内閣の中にも陸軍大臣と海軍大臣がいますが、参謀本部・軍令部と陸軍大臣・海軍大臣の役割分担はあいまいでした。
- このように、当時の政治・軍事のシステムでは、内閣と軍が別々の対等な機関として存在したのです。

問題5

陸軍は満州を日本の領土にしてしまおうと計画していました。満州にいた関東軍という部隊は特にそれを強く望んでいました。そこで1931年9月18日、関東軍は日本が経営している満州鉄道の線路を爆破しました。そしてこれを「中国のしわざだ」として、満州を攻撃し始めました。当時の内閣はもちろん陸軍大臣にさえ、この事件は不意打ちでした。この事件を聞いた内閣(陸軍大臣もふくめる)はどうしたと思いますか？

※関東軍…満州鉄道を守るために置かれた軍。中国の関東州にいたため関東軍と呼ばれる。



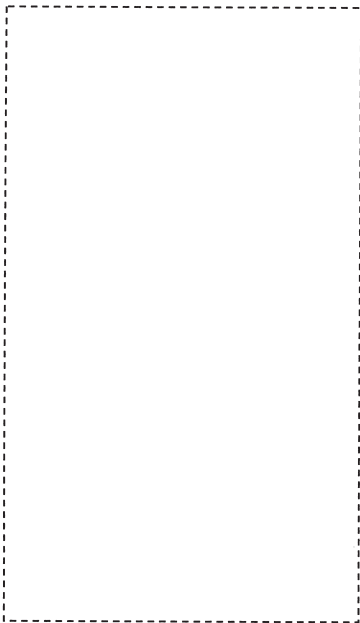
問題5

事件の知らせを受けた内閣はすぐに会議を開き、「事件をこれ以上拡大させないように」という方針（「不拡大方針」という）を決定しました。陸軍大臣もこれに同意し、参謀本部も政府に協力するほうが得策だと考えました。このように考えが一致したのは、「鉄道の破壊は関東軍が起こした」という情報伝わってきいていたからです。

関東軍は朝鮮にいる日本の軍隊の応援を要請しました。朝鮮にいた日本軍からも関東軍を応援に行きたいという要請がありました。これは事前に計画されていたことでした。しかし、内閣の「不拡大方針」により、その要請は受け入れられませんでした。関東軍はそれほど大きな部隊ではなかったため、朝鮮にいた日本軍からの応援がないと満州を占領するという計画を実行できません。関東軍は早くも危機を迎えました。

問題6

関東軍の計画は崩壊するかに思えましたが、ここで思わぬことが起こってしまいました。朝鮮にいた日本軍が独断で関東軍の支援のために満州へ向かったのです。軍隊を動かすためには天皇の許可が必要ですが、しがつて、これは統帥権（とうすいけん）を侵害する行為です。この事態に、内閣や天皇はどうしたと思いますか？



解説6

内閣は朝鮮にいた日本軍の出兵を認めてしまいました。当時の総理大臣だった若槻礼次郎(わかつきれいじろう)は「出てしまったものは仕方ない」と朝鮮にいた日本軍の応援を承認し、経費の支出を承認してしまったのです。天皇も「今回は仕方ないが今後注意しなさい」と言い、朝鮮にいた朝鮮の軍の出兵を認めてしまいます。

朝鮮にいた日本軍の独断出兵は関東軍の暴走を食い止める絶好のチャンスでした。天皇が「認めない」と言えば、朝鮮にいた日本軍は出兵できず、関東軍も事件を拡大することとはできなかつたはずですが、しかし内閣は次々と起こる事件、軍の強い態度に圧倒されてしまします。天皇も自分の率いる陸軍の連反を見過ごし、「不拡大方針」は崩れ去ってしまうのです。

関東軍は次々と軍事行動を続け、2年後には満州を完全に占領し「満州国」という国を作っていました。この一連の事件のことを満州事変といいます。

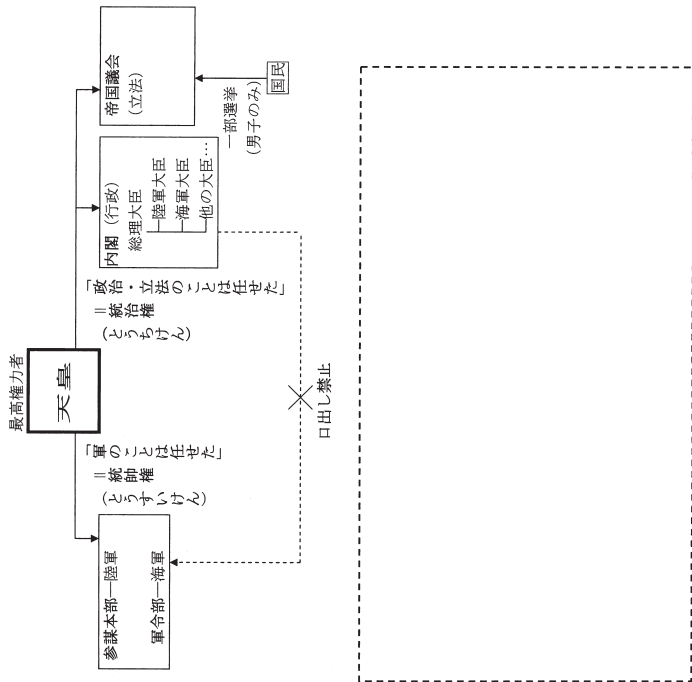
※この時期、内閣の重要人物を狙うテロなどがひんぱんに起こりました。内閣にいた人たちは「軍に反対したら殺されるかもしれない」と感じ、軍に反対しづらかったという事情もあったのです。

※天皇が「朝鮮の軍の出兵は認めない」と言えなかった原因の一つに、1928年の張作霖(ちやうさくりん)爆殺事件がありました。これは、関東軍が自分たちの言うことを聞かなくなった当時の満州の支配者である張作霖を殺した事件です。天皇に嘘の報告をした当時の田中儀一総理大臣が、天皇に怒られて辞職しました。このとき天皇は、自分の力の大きさを自覚し、「自分が前面に出てしまえば、政治のシステムに反することになる」と考えました。天皇は政治・軍事に口を出さないようにしようと思ったのです。この出来事が、今回の天皇の態度に繋がったのです。

問題7

これまで見てきたように、陸軍が自分勝手な行動で戦争を拡大し、内閣や天皇は陸軍の暴走を食い止めることができませんでした。その原因の一つとして、当時の政治・軍事の仕組みが挙げられます。この仕組みには、陸軍の暴走を招くような問題点がありました。どのような点に問題があったのでしょうか。考えてみましょう。

■大日本帝国憲法下の内閣と軍のシステム



解説7

陸軍の暴走を食い止められなかった原因として、まず政治と軍事の機関が分かれていることが挙げられる。明治・大正の時代は、政治と軍事は協力関係にあった。何人かの力のある政治家が、内閣と軍を上手に結び付けていたのです（山形有朋や桂太郎といった人物）です。ところが昭和になり、そのような人たちがいなくなると、陸軍は「自分たちには統制が必要です」。ところが昭和になり、そのような人たちがいなくなると、陸軍は「自分たちは統制が必要です。自分たちに文句を言うことは統制権を侵害することだ」と主張し、自分たちの主張を押し通そうとするようになりました。

また、参謀本部・軍令部と陸軍大臣・海軍大臣の役割分担がいまいだったため、統帥権が何を実行するのかわからなかった。その結果、統帥権が何を統率することを示すのかはききと決まらなかった。そのため軍は、統帥権を広く解釈し、「軍事のことはすべて自分たちが決める」というふうにしたのです。

軍を統率しているはずの天皇も、許可を出すという役割しか当てられていなかったことも大きな原因の一つといえます。

問題8

以下の2つの作文は、1932年1月に行われた「大阪朝日新聞」の作文コンクールで入選したものです。小学生が兵隊に向けて書いたものであることが分かります。小学生は大人から情報を得るため、この作文には当時の大人の考えが表れていると言えます。作文を読んで、当時の国民は満洲国に賛成だったのか反対だったのかを考えてみましょう。また、どのような考えから賛成・反対したのかも考えてみてください。

資料1 小学生の作文1

[illegible]

※「大君」：天皇のこと

「高等一年生」：現在の中学一年生

「内地」：日本のこと

「滄」：滄州のこと

「日清・日露の両役」：日清戦争・日露戦争のこと

「一天万乗の大君」：天皇のこと

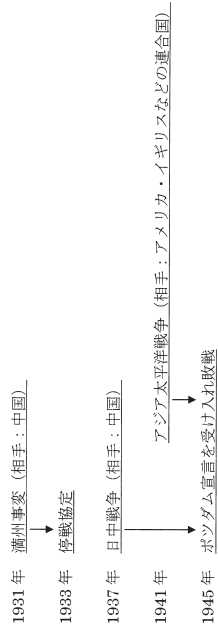
「非道」：道理に反していること

資料2 小学生の作文2

おわりに

陸軍の自分勝手な行動によって、満州事変が起こりました。そして、内閣や天皇もこれを防ぐことができず、満州事変はどんどん拡大していきました。満州事変は1933年にいったん停戦協定（戦争をやめようという約束）が結ばれましたが、1937年に再び日本と中国は戦争状態となり（日中戦争）、この戦争がアメリカやイギリスとの戦争にまで拡大していきます（アジア・太平洋戦争）。戦争の状態は1931年から1945年まで約15年間も続き、日本人に数百万人、中国人には数千万人もの死者が出ました。

15年も続いた戦争の直接の発端となったのが満州事変です。このとき、陸軍の暴走を何とか止めることができていたら、このような犠牲は出ませんでした。日本人の生活も破壊されてしまうことはなかったはずです。



資料 3 満州事変直後の新聞報道（東京朝日新聞）

爆破を企てた 支那の旅長
【東京朝日新聞】支那の旅長が、満州鉄道の沿線に爆弾を仕掛け、列車を爆破しようとした。この計画は、支那の軍閥が、日本の勢力を排除しようとするものである。支那の軍閥は、日本の勢力を排除しようとするため、満州鉄道を爆破しようとした。この計画は、支那の軍閥が、日本の勢力を排除しようとするものである。

關東軍に非常警戒令
【東京朝日新聞】關東軍に非常警戒令が発令された。これは、支那の軍閥が、日本の勢力を排除しようとするため、満州鉄道を爆破しようとした。この計画は、支那の軍閥が、日本の勢力を排除しようとするものである。

奉天軍の計画的行動
【東京朝日新聞】奉天軍の計画的行動が、満州鉄道の沿線で行われた。これは、支那の軍閥が、日本の勢力を排除しようとするため、満州鉄道を爆破しようとした。この計画は、支那の軍閥が、日本の勢力を排除しようとするものである。

急行列車危く爆破を免る
【東京朝日新聞】急行列車が、満州鉄道の沿線で行われた。これは、支那の軍閥が、日本の勢力を排除しようとするため、満州鉄道を爆破しようとした。この計画は、支那の軍閥が、日本の勢力を排除しようとするものである。

爆破は奉天總領事の御縁料
【東京朝日新聞】爆破は奉天總領事の御縁料とされた。これは、支那の軍閥が、日本の勢力を排除しようとするため、満州鉄道を爆破しようとした。この計画は、支那の軍閥が、日本の勢力を排除しようとするものである。

9月19日号外より切り抜き 中国軍が鉄道を爆破したと印象付けている

事態を擴大するな！
けと緊要閣議の賛同後相より
關東軍司令官に訓令

責任は支那側にあり
林奉天總領事の逆襲

【東京朝日新聞】關東軍司令官に訓令が出された。これは、支那の軍閥が、日本の勢力を排除しようとするため、満州鉄道を爆破しようとした。この計画は、支那の軍閥が、日本の勢力を排除しようとするものである。

9月20日夕刊より切り抜き